

がないわれも先日佐五兵衛が申送りし事ありて萬一世上の噂の如く忠信討死なせしなら娘を妾に遣はさんと約せし詞は反古には成らぬ景季への言譯に切腹なして相果んと諸肌を脱ゆへ小車胸りして(小)夫でいゝなたいお覺期にて(淨)サ、切腹するから留をるなト刀の柄へ手を掛るを小車留て(小)まア〜お待下さりませ(淨)留るは得心致せし(小)じやと申舛て(淨)然らば留すと退て居よ(小)イエ〜退ては居られませぬ(淨)得心せしか(小)サア(淨)サア(兩人)サア〜(淨)エ、不孝者めが退き居らぬかト兩人争ひ居る爰へ下手の襖を明け以前のお靜出て是を留(淨)先〜お待遊ばしませ委細はお次で伺ひ舛たが旦那様の思召に少しも御無理はムリ舛ぬ又お嬢様が御奉公を兎角にお進ミ被成ませぬも御尤ではムリ舛るが足らぬ乍私が御異見致してお得心の參る様に致し舛う暫時の間此靜にお任せ成れて下さりませ(淨)左様なところが頼むなら任せて遣るまいものでもないが急度得心致さずか(淨)不束かもの、私由へ其御請合は出来ませぬが女子は女子同士とやら能く御得心の參る様御異見致すでムリ舛う(淨)然らばそちに任せ遣はす(淨)スリヤお聞濟下さり舛とか(小)とはいへ操を破りては(淨)ハテまアお出被成れませト唄に成り小車を連てお靜上手の家体の内へ這入る跡見送り(淨)望む所の能き相手斯迄嫌ふ娘の片意地どうか得心させたい物じやト刀を鞘へ納め肌を入れて居る又通り神樂の鳴物に成り向ふが景季好の鬘袴大小忍びの拵へにて出る跡が佐五兵衛袖なし羽織達付形りの肝煎の頭の拵へにて供をして出て來り

花道にて(景季)こりや佐五兵衛然ば彌〜忠信義は先頃かの噂に違はず吉野の奥にて取圍まれ討死せしに相違ないか(佐五兵衛)へい私も體なる證據を聞ぬ其内うつかりお世話も出來ませぬゆへ差扣へて居り舛たが先刻あれ成る小柴の宅へ忠信が末期の際に頼みしといふ飛脚が參り體な事を知らせ舛たを女房めが聞て歸り夫婦早速御吉左右を申上てムリ舛れば毛頭相違いムりませぬ(景)イヤ是迄は取急いだが宅へ這入るは何となく初見參んゆゑ氣が咎める其方先へ這入てくりやれ(佐)流石は御大身のお懐子戰場番場の御先陣ではおくれを取らぬ若殿様も又此道の御先陣は別な物でムリ舛る(景)今日斗りは先陣をそちに譲らぬや相成らぬ(佐)左様なら御免下さりませ○ト右鳴物にて佐五兵衛舞臺玄關の前へ來り(も)のもう(淨)どうか佐五兵衛の聲の様ぞや○しづは居らぬか案内があるぞト呼ぶ上手家休のお靜出て來り(淨)お客でムリ舛るか○アレ佐五兵衛殿ではムんせぬかなせ御勝手より這入らしやんせぬ(佐)わし斗りなら毎もの様に御勝手口柄すつと這入るが御客様をお連申た(淨)本にどなたかお連様が(佐)梶原様をお連れ申たと旦那様へ取次で下さいト是にてお靜景季を能く見て(淨)そんならあなたか○ドレ左様申舛う○トこちらへ來り下に居て(旦那様佐五兵衛が參り舛て梶原様をお連申たとお玄關に扣へ居り舛る(淨)何景季殿が來來とな○是へ御案内申せ(淨)畏り舛た○ト玄關の方へ來り下に居て(あちらへお通り下さりませト佐五兵衛先に座敷の方へ這入るお靜は景季へ目を附能い男だといふこなし有て上手の

家体の内へ這入る淨雲は景季を出迎ひ(淨)先くあれへお通り下さい(景)夫ではあまり上座也(佐)ハテ御遠慮なくあれへくは是にて景季上座へ住ふ佐五兵衛は下手へ住ふ淨雲宜敷住ひ合方きつぱりと成り(淨)御意得舛るは初めてなれを兼て是成る佐五兵衛の案内によりそこ元のお面体は存じ居る手前は小柴淨雲でムる能ぞ御入來下された(景)是へく御丁寧成る御挨拶に預り申す手前は梶原源太景季是なる世話人佐吾兵衛が申入れたる御息女の義を御承引下されし由此末共に幾久しく縁者の因みをお結ぶ下され(佐)お取極も致さぬ内に御先ん方の若殿様をお連申は何とやら早まる様にはムリ舛るがこちら様でも御得心あちら様では疾くも御懇望の事なれば故障の有ふ等なければ先ッ兎も角も若殿様をお連申てムリ舛れば差越舛た御對面は初春だけにお目出度御承知被成て下さりませ(淨)サ、左様どもく善は急げと申柄は々様な事と早いがいよ〇ト上手へ向ひ(こりやく)娘何れに居る是へ參つて景季様へおもてなしを致すが能いト呼ぶ上手の禰の内にて(靜)お嬢様是をお持下さりませト聲して以前の小車高茶壺へ茶碗を乗せしを持お靜に連られまほくとして出て來り小車いやがるを無理に進めて景季の前へ湯を出させる事宜しく小車うつむき居るゆゑ景季こなし有て(景)どうか心に叶はぬ様子トいふを冠せて(佐)イエ恥かしがつて居られ舛のが則直うちでムリ舛る(淨)こりや娘御挨拶を致さぬか(小)ハイト矢張うつむき居る(靜)彼のお方様でムリ舛ればお恥しい事はムリ舛ぬちやつと御挨拶を遊ばしませ(小)お初

にお目もじ致し舛る(景)御身は初めて逢れしならんが我は祇園の社にて再度お身を見受居れば初對面とは思ひ申さぬ(佐)先ッ御挨拶が濟し上はお預りのおみやげを〇モシお静殿とつかお盆をかして下さい(靜)ハイく畏り舛た〇ト床の間にある折敷を持って出て(是で宜しふムリ舛か(佐)能いともく丁度よい〇ト懷中か紙に包みし目錄を出し乗せ(お給金は改メ舛てお取極めがムリ舛うが御先ん方様の是はお出産幾久しく御受納下さりませ(淨)御町噂なるお贈物幾久しく受納致す景季殿存る(景)些少な手土産御受納下され其御禮でと恐入舛ト此内小車始終ふさいで居る事宜しく佐五兵衛是を案事るみなし(佐)まづお目出度お取極のお盃を被成舛て御安心を被成い舛(淨)何様夫が肝要じや申さば婚儀も同様なれば銚子の屠蘇や蓬萊を是へ直してお目出度どうか御一献お過し下さいト是を聞小車堪へ兼まふなしにて(小)ハアト泣伏す(靜)ア、モシお嬢様お癪がおこり舛てムリ舛るかト態と紛すこなしにて介抱して居る景季此体を見て思入有て(景)祝義の盃致すと聞歎きに沈む此様子(淨)アイヤ彼れのは嬉し泪〇イヤサ嬉しみに付悲しみに付ケ兎角泪の先立つは女子の常とは云ひ乍扱く不興のやつではあるトいひ紛らすこなし佐五兵衛も氣の毒なるこなしよて(佐)何んで有ふとお取極のお盃さへ濟して仕舞ばもう御安心と申者少しもお早くお盃事を被成い舛るふ宜しふムリ舛る(景)イヤく其義も御息女のお心決せし其上にて盃なす共遅かるまゝ先今日は是迄にて此座を開くと仕らう(佐)夫では極めのお盃も被成れませずに

お開きに(景)ハテ申さば祝言同様なる固めをまずに此体では(淨)ヤア(景)イヤサ此貞節も
 思ひ替へ自ら進んで盃を致すと有るを相待て目出度盃致すでムらう(淨)然らば暫時奥の間
 にて御休息下されし〇とはいへ余り御風情なく(景)ハテ其御配慮には及び申さぬ(淨)左様
 ムらば景季殿(景)頓て御縁を結ぶでムらう(淨)ドレお見送りを致し外う(佐)是は何だかお
 氣の毒だト雙方辞義をなし景季先に佐五兵衛附てお静見送り玄關の方へ出るお静履物を直
 す景季佐五兵衛下へおりるお静座敷へ歸る兩人は花道能所迄行(景)こりや佐五兵衛の様
 子では當人は未だ得心致さぬのじやあ(佐)イエ得心を致し外たど申事ゆへ早速にお知らせ
 申てムら外る(景)堅固と呼ばれし景季も戀の奴に使れたわへト通り神樂に成り景季先に佐五
 兵衛面目なきこなしにて供をして向ふへ這入る跡に淨雲腹の立こなしにて(淨)こりや娘そ
 れへ出い〇何が悲しく泣き居つたか盃致す際に望みそちが落泣せしゆゑに景季殿も興をさ
 ましそこゝにして歸られしは親に而びをかゝせる娘言ふ様なき不孝者めが最前いひし如
 く切腹なして不孝の罰忽ち其身に當てくれん(淨)其御得心をおさせ申も余り過急な御先
 方様の御入來ゆゑ御嬢様へ御意見致す間もなくお興をさましてムら外るが初めてお見上
 げ申外た梶原様の御様子に成程あれも且那樣がお嬢さまへ御奉公をお進め遊ばす筈成り
 と存外ゆへ私も供へお進め申外て御得心をさせ外れば先へ暫くお任せ被成て下さりま
 せ(淨)奥へ參つて娘が挨拶待て居る柄意見をなし能き吉左右を聞せてくりやれ(淨)夫は宜

しふムり外る先へお奥へ且那樣お越し被成て下さりませト唄に成り淨雲上手の家体へ這
 入る跡時の鐘に成り東西の窓ふたをふるす(淨)春とはいへとまだ短日ツイ今の間もとつふ
 りと日が暮て仕舞ふたればドレおあかりを燈してからお嬢様へ私がお相談がムり外柄暫く
 お侍遊ばしませト正面の奥へ這入る跡小車顔をあげ(小)父上様へは濟絲ども忠信殿が世に
 なくば髪をおろして尼となり余人に肌は任すまいと心に誓ひし其中へ思ひも寄らぬ此難題
 たどへお静の意見でもなんぞ得心なるべきを父上様の御最期を見ぬ間にいつそ自害して
 死ぬ外はないわいなト愁ひのみなし是か床の淨瑠璃に成り「あら玉の春を向へて時め
 きし余所は賑はふ其中に憂を身に知る小車おめぐる思案も暮てし日わし短き黄昏をたど
 りて人目忍ぶ山富士編笠に面体を包みて佐藤忠信が小柴の門をそつと入り邊りを兼るかこ
 ち言ト此内向ふ忠信着流し大小達付草鞋形りにて編笠を冠り出て來り花道にて留り思入
 有て(忠信)誠や人の盛衰は斯く迄變る物なるか世に有る折は堀川の御所へ詰合ふ源氏の武
 士都の町も憚りなく往來狭しと歩行し身も今は日蔭の落武者に天高けれを腰を屈め厚き大
 地も心を踏迷ひて身一ツの置所さへなかくに人目を厭ふ都の町暮るを待て入り込しも
 過し堀川夜討の砌り本意なき留別致したるあの小車に面會なし様子が尋ね遣はしたさどう
 か首尾よく逢度の物ぢや〇「玄關へ寄り庭口の垣の外かさし覗き(夫)居るハ小車ならず
 や但まハ下女のお静なるか「呼ぶ聲さへも憚りてかすうに内へ通じれば(小)ろういふお聲

はどなたなるか(忠)ヲ、小車の忠信じやト笠を脱ぐ(小)エ、忠信様がお出さな○「こがれし余り玄關へ立出てぞつとこわげだち(エ、おなつかしや忠信様能ぞ此世へお姿をお見せ被成て下さり舛た南無阿彌陀佛」ふるへ乍に伏し拜めば忠)こりや、小車何を致す念ぶつを唱へ合掌すすはいと思はなき事なるぞ(小)サア無念の御最期被成しゆえ御念佛にて御成佛被成る、お氣はふり舛ぬかせめて未來の苦げんとやらをお退れ被成る其爲に御回向致してあげ舛る(忠)無念の最期をなせしとはうりや誰が事を申のじや(小)あなたは吉野の山中にてお討死被成し由(忠)ハテうろたへて何を申討死致して果た者が何んで尋ねて參らふぞ「いふ聲音さへ替りなき様子に心落付きて(小)そう仰しやればおみあしも満足な様子ゆへこりや幽霊ではなかつたか(忠)何の格別そち迎も無事で居りしは我満足シテ舅御にも替りはないか(小)其義に付ていろ」とお嘶しがムリ舛ればあちらへお通り下さりませ(忠)然らば奥へ通らふか相成べくは勝手口より自立ぬ様に致したい(小)私迎も下へおあり足が汚れて居り舛れば勝手へ參つて御一所に足を洗ふでムリ舛ら(忠)慥か此家の勝手口は是柄這入ると覺へしなり(小)能くお忘れ被成れませぬ「まゝく立てを疑ひの晴ぬ思ひにさぐる足ト小車こなし有て忠信の足を撫て見る(忠)エ、何を致す(小)イエかうお出被成れませ」打連れてこそ入にける「かくとも知らず燈臺をもして下女が携へ出で遊り見廻しうち案事(静)こりや今の間にお嬢様が何れへやらお出の様子もしもの事でもある時は夫こそ

お家の一大事お嬢さま「呼立られてせわしくも洗足なして納戸を出でト玄關の正面の襦を明け小車出て來り(小)ア、コレ静かに仕やらぬか思ひ掛なく忠信様が此世にながらへお出有て忍んでお便り被成たわいのふ(静)エ、夫ではあの忠信様が(小)今勝手にてお洗足を被成てお出被成るわいのふ(静)そりやまア誠でムリ舛るか(小)本の嘘のと勝手へ行御介抱してあげやいのふ(静)夢の機なる其お咄し御様子を見て參りませう」とかうする間に忠信も顔押明け入り來りト下手な忠信出て座敷の方へ來り(忠)ヲ、静も無事よて有たるか(静)本にあなたは旦那様よふまア御無事でお出遊ばしお嬢しひ事にムリ舛る(忠)斯様に生き延び此都へ再び忍び參らるゝと思はざりしも辛ふじて虎口の難を退れいで山野に陰れ世にひそみ漸くにして閑道傳ひ此地へは參りしが小車初め静迄が無事で居るとは悦ばしいシテ親御たる入道殿にも御息才にて居らるゝかな「尋ねに小車うちまほれ(小)父上様にも御無事にて一ト間にお出被成るれお奉公せよとのお進めに途方にくれて居り舛る(忠)スリヤ某が世に落てられ頼みなき身となりし故奉公せよとお進め有りしか(小)けふ斗らすもお前様よ吉野の奥まで御最期の折柄お頼み受し者が尋ね參つてお討死の様子慥に知らせし故奉公せよと御難題いなむ時に先方へ言譯立ねば御切腹を聞てあるにもあらぬ思ひ所詮命を捨てせねば女子の道が立舛ねば覺期極めて居り舛る(忠)吉野の奥にて最期の折り頼みを受し者なりとは心得難き事どもなり(小)そんならあなたは左様な者を御存じではムリ舛ぬか

(忠)佛に仕ゆる一山の衆徒ばちすら敵と成り我主従を取圍み虎穴に落入る吉野山味方の外に誰一人頼みと致す者なければいかで余人を頼まんや(小)ろうとも知らず父上様が誠にあなたがお討死被成し事と思召奉公せよと仰しやれと景季殿に頼まれて媒チすれば佐五兵衛も其身のるきになる事故持へ事にて父上迄おだまし申て縁談を整んとせし物なるか(忠)何景季が縁談を佐五兵衛とやらに頼みしとは當時都に在番と聞く梶原源太景季なるか(小)サア人も有ふに判官様を讒言せしと聞及ぶ梶原殿の子息ゆへ命を捨てても父上の仰せを背く身の覺期「様子聞取り忠信もよき相手ぞと打悦び(忠)イヤ景季なら某もともく進めてやらねばならぬ(小)エ、そりや何ゆゑで(兩人)ムリ舛る(忠)父の梶原景時は鎌倉殿へ讒を搆へ佞奸邪智の曲者なれとそれに引かへ景季は仁義を守る誠の武士われもいつぞや戰場にて其働きを見請しが勇あり義ある壯士なり夫故親御浄雲殿にも御身に奉公進めしならん父の詞に随ひて今ぞ時めく鎌倉方仁義を守る景季に其身を任せ一生涯世を安泰に送るのが父への孝と家の爲篤と分別致すがよい(小)イヤ夫にては父上へ孝の道は立舛ても女子の道が立ませねば譬へ命を捨舛ても余人へ肌は任されませぬ(忠)ハ、片意地な其答へ由なき我へ操を立父へ孝を捨てては浄雲殿へ濟されば是非に得心させねばならぬ(小)そんならやつ張私に愛想があつき被成舛たか(忠)全く左様な次第では(小)左様でなくば私をお見捨被成て下さり舛な(忠)イヤ其片意地にも困つた物じや「暫し詞もなき折柄(浄)是はく忠信殿能くを諭して下されしを(忠)御親父にもお聞ありしか(浄)禊越しに承つたがあらまき最期を遂られしと聞て無ざんと歎息せし御身が長らへ居られしとは此上もなき我大慶能くぞお便り下された(忠)入道殿にも御老後のお障りもなく御勇健にて春をお迎へ被成れしは手前に於ても悦ばしく大慶至極にムリ舛る「挨拶終れば浄雲がかたへの下女を見返りて(浄)こりや静とちは次へ遠慮致せ(浄)畏り舛てムリ舛るト此内お静奥へ這入る(忠)シテ又御親父入道殿の御所存は如何でムる「尋ねに浄雲聲ひそめ(浄)他聞をさけてお手前へお談事申は外ならず此家の内へ人知れずおかくまい申さん爲(忠)何と語る、(浄)媒チのものの私欲にふけり持へ事とも存せずして御身が討死有りしと聞娘を一生埋れ木に致すが不便と思ふ故仁義を守るものゝふと兼て噂に聞及ぶ梶原景季我娘を望むと有るを幸ひに得心させんと進めしかを虚實とりて控こ元が無事で此家へ便られしは此上もなき我が悦び一旦娘がお世話に成り御恩を請し上柄は一命にのへ家にかへ此家の内へ人知れずらくまい置て斯程迄慕ふ娘の貞節を立させやりたき親の慈悲是非に御承知下されい(忠)イヤ折角のお詞乍此忠信は御主君の御先途見届け諸共に討死致す覺期也へ此家へ隠れ居る事は望む所候はず又隠す事洩安しと露顯とならば御難儀を掛ねばならぬ尋ねもの何卒御親父入道殿にも奉公の義を小車へお進め下され御老後の御無難お斗り下されい(小)父上様もあの様におつしや舛れば忠信様どうぞ不便と思召此家にお忍び下さりませ(忠)入道殿迄其様に仰せ下さる御深切

否ちも本意ならざれば先鬼も角も今宵一夜は御世話に成るでムリ歟(浄)スリヤ御逗留下
 さるとの夫にて娘の望みも叶ひ且れに於ても悦ばし(小)是と申も父上様のお情お慈悲は
 お詞故有難ひ事でムリ歟(忠)去り乍余人と違ひ日影者ある手前ゆへ御心配の程應かごと
 お氣の毒に存じ歟(浄)何のく此方かお頼み申程なれと氣の毒なる義がムらぶ娘も今
 宵は久方ぶり澤山馳走を○アイヤ積る咄しを致すがよい○「巧みと知らぬ娘氣の今はどう
 やら面はゆげ入道心にもくさんなし(併)媒チ致したる佐五兵衛が參らぬ様斷りいつて參
 らにや成らぬ(小)夫あれば可内が戻り歟たら早速に使ひふお遣り被成ませ(浄)イヤ使ひで
 は佐五兵衛めが容易に承引致すまい拵へ事を致せし事共それと言すに痛め付再び當家へ足
 踏の出来ざる様にせねばならぬ(忠)何事なるか御自身に夜中を厭ずお出向の御苦勞至極に
 ムリ歟(浄)然らば後刻久くで例の圍碁でも圍み乍今宵とゆるく咄そふ柄心落付て待
 てムれ(忠)何様あれに相替らす碁盤が設けムり歟るはまだお手並は下りませぬな(浄)イヤ
 當節は老眼ゆゑ兎角に手落が有て成らぬ(忠)などと手前にあなごらせ(浄)ヤ(忠)まだく
 油断は出来ませぬ(小)左様なればおあうりを(浄)イヤ春の夜の宵の口あかしなぞには及ば
 ぬぞ(忠)然らばお早く御歸宅を(浄)必ず心配無用にさつしやれ「情ヶと見せて欲の道迷へ
 ば開き門内や探り足して出て行ト此内淨雲玄關の方へ出る小車付て來り草履を直す淨雲是
 をはき花道へ行にたりとこなし是を通り神樂の鳴物に成り足早に向ふへ這入る奥か以前

のお靜出て來り(靜)お次で御様子承りお嬢様のお悦びをお察し申上歟てお嬉しお存じ歟る
 (小)聞しとあれば改めて咄すには及ばぬと父上様迄何の様に仰しやつて下さるゆへわしも
 安心したわいのふ(靜)此お使ひが私で濟事ならばと存じ歟れと次ぎへ立てとの仰せゆへ出
 るに出られずお次の間に差扣へて居り歟た(小)父上様のお歸り迄お待久しふムリ歟れば嘉
 儀を祝せしめの酒肴お過し被成て此程の愛をお忘れ下さりませ(忠)夫は何寄忝ないろも堀
 川を立退きしより御主君初め我くも山野を宿と致せし故好める酒も呑事能はずとんと味
 をも除れた様じやが詞に任せ久かたよて今宵は一献過そふか(靜)アモお目出度お酒盛是へ
 持參を致し歟う(小)早ふ是へ持ておじや(靜)畏り歟てムリ歟る「軒毎に色を飾るや三ツの
 朝すげなき松も笑顔と見ねて風に袖ふる廓こそ葉ト此内お靜上手の床に飾りし瓶子の酒
 と喰積の于肴のの外銚子土器杯持て出て宜敷並べ蓬萊の三寶を有合お碁盤の上へ乗せて眞
 中へ直し忠信へ酒を進める事宜しく(小)ほんに斯ふして蓬萊を靜が氣轉で直せしめゑ婚禮
 の夜の様じやわいのふ(忠)調度折能く隣家にて調ぶる琴も時の興うちも一献過すがよい
 (小)ハイ目出度頂戴致し歟ふ(靜)アモお睦しひお中じやなア「可愛らしさと花の香を問ふ
 て見たいは八重霞トお靜酌をして小車宜しく呑む事(忠)こりや半年程逢ぬうち仕込し者が
 あると見へ大ぶそちは酒ぶあがつた(小)イエあなたの外にさ、事を致した覺へはムりませ
 ぬ(靜)そりや私がお傍に居てよい證人でムり歟る(忠)イヤ縁者の證據は當てにならぬ(小)

「さあんまりな疑ひと腹の立てなし(忠)其すねるのが憎くまいわへ」春中叩いてたわむれもさ、の機嫌の千世萬代ト宜敷こなし有てお静爰に居ては邪尸だといふ思入有て(静)はんにわたした事七種のお支度を致すをどんと恐れ舛た誓く御免下さりませ「神の年越未長かれといふて別る、響えびすとお静奥へ這入る(小)ア、コレをなたが行やつてはお酌の者がなわいのふと能といつて忠信の傍へ寄る(忠)酌がなふてはどののか(小)イエ左様ではふりま糸と(忠)左様でもくば今一献過して身共に返盃しやれ(小)イエどうぞおなたのお呑みさしを頂かして下さりませ(忠)夫では波くついでくりやれ「猶奥深く契りけるト兩人宜敷琴唄のあけにて此道具廻る

本舞臺都て梶原旅館の休平舞臺上下に筋りを焚二重に近臣二人小袴烏帽子形にて能所に書院火鉢を置此見得通り神樂の鳴物にて幕明く(○)早今日も例年の門飾は取れ舛ても何となく正月は陽氣で宜しい物で(△)言る、如く旅館ながら獅子舞杯が門前を通行致す春の夜はいと心が浮立舛るト兩人番をして居る矢張右の鳴物にて向ふ以前浄雲先に佐五兵衛連立出て来り花道にて(浄)あれへ見ゆるが聞及ぶ景季殿の館あるか(佐)まだ響の口の事なれば番士が詰合居り舛(浄)然らば案内致してくりやれ(佐)かうお越し被成舛(○)御兩所様お夜詰で(△)誰かと思へば肝煎佐五兵衛何用有て参りし(佐)若殿様へ御直談をとげ度といふお方様を御案内に頼まれ舛てお連申て(△)シテ御直談を

逐度といふ御仁は何れの者なるぞ(佐)四條通りにお住居の小柴入道浄雲様と仰しやるお方で(△)舛るト此時正面の襖を明け景季出て来り(景)其入來待兼居つた早く是へお通し申せ(佐)お待兼と(△)舛れば是へお通し申舛(○)ト門の外へ出て(あれへお通り下さり舛(浄)旅館といへど早速のお逢ひよなるとは忝ひト内へ這入る景季見て(景)是はく入道殿能ぞお出向されたそこは端近先く(是へ(浄)然らば御免下さり舛(佐)若殿様へ申上舛る早速お人拂ひの義をお願ひ申上舛(景)承知致した兩人次ぎへ(兩人)ハツト奥へ這入る跡合方に成り(浄)扱先刻は折角の御入來成りしを娘めが御不興なる落泣せしお心さへられしかお立歸りよ相成て思はざる無禮の段く偏に御用捨下さり舛(景)イヤく左様なお詫では景季却て痛ミ入る操を守る女子たる身は斯く有るべきと察せし故猶豫致して此方か一旦席を開きしが何を申も忠信が討死なすと聞上は落泣せしとて返らぬ事跡よて思ひあきらめられ御得心が参られしか又は操の捨難く御不得心で(△)舛るよな(浄)其義に付てそこ元へ申入度事有て今晚出向参りし次第篤とお聞下さるべし(景)シテ御自身にお出向有りし次第と申は如何成るわけ(浄)されば今響めにはからんや忠信めがたより参りしを幸ひに慈悲と見せて忠信を今響我宅へとよめ置ばそこ元様のお下知よて是より直に人歩を差向ケ日影者成る忠信を安く召捕鎌倉へお差送りに相成らばそこ元様の手柄と成り又忠信は縛り首世になき者となる上は娘も未練の思ひを斷ち奉公の義を得心なし日ならせ致して縁

談の整ひ舛うと思案乍手だてを設けてムりる舛ト是を聞景季立腹せしこもし有て氣を替へ
 (景)こりや佐五兵衛シテ忠信が討死せしとして小車殿を欺きしは如何成る手だてを構へしぞ
 (佐)夫は斯様でムり舛る淨雲様が私しへどうした物とのお内談に子分の中でもそんな事に
 は物馴れて居る野郎を構み吉野柄來た山がつの飛脚に仕立女房に案内させて小柴様のお宅
 を尋ねた体に見せ忠信様は吉野山で最期の際に遺言を頼んで小柴の小車様は只何事も是迄
 とおきらめるといふ言傳を誠しやかに言せたのでお年の行ぬお嬢様は首尾能欺きおふせ舛
 たが思ひ懸なく忠信が世上此噂と相違えて生延て居て此都へ忍んで來たので露顯となり諸
 らぬ事に成り舛た(景)然らば矢張身共迄そちは欺きおふせたのだな(淨)サ、其お詫も忠
 信を無理に留め置訴人おしそこ許のお手柄になしたる上に我娘得心させてお望みを遂させ
 んといふ思ひ立チ(景)イヤ其手柄望みでないわ(淨)何お望みで(兩人)ないとはな(景)鎌
 倉殿が判官の行衛を詮義致せとある嚴敷命は蒙れど其臣下たる忠信を召捕といふ命なけれ
 ば此忠信は召捕ぬ戀慕の情に心迷ひ無道な事をせし杯と世上の惡説請る時は末代迄の武門
 の恥思へば先刻汝等の手だてに落入り盃を致さしりしが我仕合せ危ふき事有りしよな
 (佐)夫ではあなたがお望み迎も叶ひませぬがもうおあきらめムり舛か(景)ヲ、
 娘は勝れし器量なれど親が人外なる上は戀慕の念もはや是迄召抱への義は望みでない見る
 もなか／＼けがらはしい疾／＼此場を立去りおらう(淨)イヤ人外とはお情ない娘を望む御

身故手柄をお譲り申さんと態／＼参りし入道淨雲鎌倉殿より忠信を召捕御沙汰がなき迎も
 判官殿に附隨ひ天下を騒がす大罪人訴人をなせば一かどの恩賞あるに相違なし(景)ヤア私
 欲に迷ひ眼くらみ仁義を知らぬ汝等と詞かわすは無益を至り早く此場を立去りおらぬか○
 ヤア／＼兩人早参れト呼ぶ是にて奥より以前の近臣二人出て來り(兩人)ハッ何ぞ御用にム
 り舛か(景)それなる兩人追拂へ(兩人)ハッ心得舛てムり舛る(淨)エ、歸らぬとはいひ申さ
 ぬ手柄をさせんと訴人に参り追拂はれてたまるものか(佐)もう／＼何も仰しやらすに早く
 表へお出かけ被成いト氣味悪きみなしにて淨雲をせり立門の外へ出る(景)それ門の戸を建
 て仕舞へ(兩人)ハット門をンる事宜敷淨雲佐五兵衛花道へ來り思入有て(佐)げぢ／＼でも
 参つた様に扱／＼奇怪千萬だ(佐)其くせあちらがげぢ／＼の本家の忤でムり舛る(淨)げぢ
 の忤よ下智もあくこちらをげぢにしたからは(佐)是柄直に六波羅の北條様の下知をうけ
 (淨)向ふ捕手も多人數に百足の様な足をつけ(佐)捕手はこるげて芋虫でもこつちは褒美の
 こがね虫(淨)イヤこがねが草鞋虫の大きな金を貰ふ氣だト通り神樂にて兩人連立向ふへ這
 入る(景)扱／＼浮薄なやつらじや(○)シテ御立腹被成舛たは(△)如何成る次第でムり
 舛る(景)欲に目がくれ義を捨れ無道をはるるやから故早く追出しやつたのじや(○)夫で
 はこたびの御相談も(△)はや御相談にムり舛か(景)譬へ如何なる美女なりとも父があれでは
 ○ト立上るを道具替りの知らせ(望みでないわ)ト宜敷思入此模様合方にて此道具廻る

本舞臺元の小柴の宅の道具能所に燈臺此脇へ碁盤を置其外手道具は取片付あり床の送りにて道具留る「更渡る夜も亥の刻に程近くふす猪の床のそれならで契り嬉しく小車が結びし夢の覺やらず大醉なせ忠信は落人の身の油断なくそつと襖を立出てト上手の家体以前前の忠信麻間着形りにて出て遊りへ思入有て床の合方に成り(忠)堀川御所を退去の後は半歩まりの其間好める酒も呑ざりしが久方ぶりにて呑みしゆゑか燕酔なして小車迄前後たわいのなき様子さるにても御主君には先頃お別れ申せし折陸奥さして落給ふと仰せありしが鎌倉の詮義殿敷新關を諸國に設ケある上は容易に御下向叶ふまじわれは夫には引替て都へ安く忍び來て此燕酔と勿躰なし主君の寵を蒙りて懐胎ありし靜御前お跡を慕ひまいらせしを落人の身の連れ難しとあかぬ別れをな一給へばこれも此家に逗留なし妻の情にほだされては不忠不義なる腰ぬけ武士こりや小車にいひ諭し今宵を限りにせねばならぬ○「たもまぬ心いつとなく眠るは過す酒の醉碁盤にもたれ高いびき如くとも知らず淨雲は捕人の人數引連て我門内も忍び足垣の外かさし覗き仕すはしたりと耳うちなし小隠れなせば心得て込入る大勢一時にとつたやらぬと組付たりト此内忠信碁盤にもたれ眠る事宜敷能程に向ふか以前の淨雲先きよ鑑下の捕手八人熊手の得もの杯を持附添さし足にて出て來り直に舞臺へ來り淨雲柴恒の外より内を伺ひうまいと云こきし有て捕手に呷き玄關の脇へ這入る是にて捕手八人二重へ上りこちらへ來り忠信に組付忠信是を投退け有合ふ碁器など取て目潰し

に打付る事なぞ有て屹度成り(ヤア何ゆゑ有て汝等はかゝる狼籍致しかるぞ(捕手)ヤア何ゆゑとは横道もの源家の落人佐藤忠信退れぬ所だ(八人)覺期なせ「忠信扱はとうち驚き(忠)扱は訴人の者あつて召捕に向ひしよな(捕)マ、此家の主人が訴人により召捕に向ふたりイデ尋常に(八人)細かゝれ(忠)チエ、娘をよばに止宿させ情と見せて小柴入道おれを訴人の手だてなりしかろうとは知らず油断なし此身の大事に及ぶともやわか細目をうけべきやならば手柄に搦めて見よ(捕)いふにや及ぶ(八人)忠信やらぬ「やらぬと又も組付を碁盤をとつてめつた打見る間にうれへ二三人血汐を吐て死してんけりト此内忠信伴の碁盤を持って捕手八人を相手に立廻る内兩人を左右へ打倒し真中にて碁盤を振り上ぐ屹度見得是か詭へ鳴物に成り宜敷立廻り忠信碁盤を投付けトト上手の床の間にある刀を取て引抜く是にて捕手皆く悔りして向ふへ逃て這入る忠信是を追駆ケ這入る 追ふて行く跡を慕ふて小車が行んどなすをあなたか立出る父が押とゆめ(淨)こりや、娘うろたへるな刃物を持って何れへ行「娘は泪の聲くもらせ(小)エ、お恨めしい父上様何で大事お忠信様のあなたを訴人を被成舛た(淨)マ、何でとは知れた事訴人をすればいつかどの恩賞褒美に預るゆゑ是迄おじみのよしみがひ北條家へ訴人なま後日の難を退がれるのだ(小)ろう開上は猶の事親子一ツでないといふ身の言辭を忠信様に逢ふて言ねばなりませぬ「親子等ふ其所へ欲の道づれ佐五兵衛が見ん相かへて入來り(佐)小柴様大きに當が違ひ舛た(淨)何だ當マが違つたとは(佐)

訴人をしたら六波羅から褒美の金を下さると思ひの外にしふが出て觸渡しもない訴人をして都を騒がす不届き者と今町會所へ呼び付られあまたとわしは都の内を追放の身に成り舛た(淨)何訴人をしたのがお咎ので追放の身に成たとなや……「あきれし儘に口あんぐり巡る因果と小車が入を咽へ突立れば(佐)ヤ、お嬢様には何故に(忠)エ、おのれは氣でも違ひおつたか(小)欲に迷ひし父上へ御意見の爲此自害トよろしく此道具廻る

本舞臺堀川御所中門外の道具風の音にて幕明く、床の淨瑠璃に成り「吹送る夜風にぞめる堀川御所六日の月の影薄く物凄くころ見得にける折柄表の方かして忠義によりし忠信がト此内遠寄を冠せばたゞに成り向ふか以前の忠信抜刀にて走り出て來り(忠)追來る敵の來らぬ内堀川御所の中門迄忍び入上柄は君の居ませし御館にて後世の旅立ヲ、そふだ「勝手知つたる門外へ伺ひく進み寄邊りへ心奥深き妻戸よつゞく廣椽先き月をよすがに松ヶ枝か何なく庭におりたちてト此内忠信舞臺に來り内へ忍込ふと思入此内知らせなしに舞臺廻る

本舞臺堀川明平御所判官殿御座所の体義太夫の内道具留るト下手ついじ松へ忠信登り内へあり中門のかんぬきを取り兩扉を左右へ開き乍(鬼門の隅に備へある君の甲冑借用なさん「勇み進んで入にける折柄込み入敵勢が射くる矢種のすさまじくト忠信御座所の奥へ這入る此時中門の外を軍卒大勢出て來り上手へ矢を放ち能時分に忠信誂への甲冑弓矢を持

出て敵兵を上下へ追散らし件の鎧をおろし是へ兩手をつき「慎んで禮拜なし(吉野を落させ賜ひてか此方勿躰なくも御身替りに立し某是にて御ん具足御ん弓矢を着用をし清き最期を遂ん所存偏へに御免し賜はれかし「いませが如く敬ひてト床のメリヤスに成り件の鎧を着る爰へ又兵士出て立廻りに成り能時分下手中門外を江間の小四郎出る(兵士)ヤアく忠信誓く待て(忠)何がなんとト屹度思入是を誂への鳴物に成り向ふより義時好みの拵へにて兵士大勢付添出て來り直に舞臺へ來り(義時)六波羅かの御下知にて江間小四郎義時が召捕に向ふたり神妙にして繩目を受よ(忠)ヤア繩打坏とは奇怪至極景時などが讒言により鎌倉殿の御不審か、り世に落武者と成り給へど御主君初め我くも犯する科のあらざれば繩目を請るいわれなし(義)イヤ夫なれば猶もつて御不審なる、時節を待て罪なき次第を訴へ出忠義の道を立ざるを鎌倉殿の御不審蒙る判官殿の御内にて日蔭者なる其身をもつて都へ立入り大膽にも止宿などを致せばこそ訴人を致す者有て我も討手に向ひしなり天下の法にもぞりし上は繩目を請るへ勿論にて言れなしとは申されまじ此返答の如何成るぞ(忠)イヤ譬へ時節を待とても讒者の詞を用ひ給ふ鎌倉殿のお疑ひ晴る、時節の有るべきや主君の先途見し上よ死生を共に致さんと入込む都で運拙く訴人の爲に八方を取圍まれし上柄は主君の御座所と定めありし此門内へ切入て最期を遂んと致すのを妨げなさは小四郎殿とて用捨致さず切まくり一世の手なみをお目にかけん(義)判官殿の居られたる堀川御所也へ切入て

最期の場所になさるとは忠臣に似て忠臣ならず後日にお崇り有事を汝は心付ざるか(忠)何
 と(義)心付ずば申聞ん〇うも今般の御不審は讒者の爲とは申乍判官殿にも誤りのなきにし
 も候はずいかんとなれば鎌倉を使節に登りし土佐坊を此堀川にて討取られしが是第一のケ
 條ならずや其臣として又候や都を騒がすのみならず鎌倉殿の命を請帝都の守護なす我々
 の下知に随ふ者共を多人數討て相果なと其罪誰に及ぼさん判官殿の身にありし臣下の爲に
 其罪を重ぬる時は汝こそ不忠の汚名は退れませしサそふへ心が付しなら神妙に猶豫を願ひ潔
 よく切腹致せ義時は是にて見分なさんと思入にていふ是にて忠信成程といふこなし有て下に
 居て(忠)ハ、ッ忝き御諭し血氣にはやり飽迄も刀の目釘のつまかん限り勇を振つて相果ん
 と思ひしは日か淺智なり壯年なれと義時殿理非明白なる御意見に清き最期を仕れば何卒御
 猶豫被下べし(義)流石は忠信我理解を會得なせしは悦ばし、然らば義時身不肖乍介惜なし
 て取らするぞ(忠)スリヤ御介錯下さるとな北條殿の御息子よ介錯受れば末期の本懐御禮の
 印は主君より先頃給はる此一刀貴殿へ御譲り申べし(義)扱は夫なる一刀は判官殿より拜領
 とな(忠)弓矢の家へ生れたる其甲斐ありて重藤の弓に表せし星の數今年積て廿八歳(義)
 其うら等と元等の月日いまだ地に落糸ばかばねは爰に終るとも名はるんばしき佐藤忠信
 (忠)勇あり義ある武士のお情け(義)然らば十分支度せよ(忠)末期の御猶豫忝しと忠信諸肌
 腕き刃を腹へ突立引廻し(忠)イヤ義時殿御介錯(義)見事の切腹〇ト太刀を抜て搦へるを木

の頭(見届しぞト宜敷こなし此模様太撥の時の太鼓にて柏子幕

四幕目

鶴ヶ岡別當所の場
 同神前法樂舞の場

- | | |
|-------------|-------------|
| 一 工藤左衛門 祐經 | 一 工藤比奥方 柳の葉 |
| 一 秩父庄司次郎 重忠 | 一 堀の奥方 しがらみ |
| 一 長沼五郎 致治 | 一 侍女 梅ヶ枝 |
| 一 梶原三郎 景久 | 一 同 青柳 |
| 一 安西 彌七 | 一 同 桃園 |
| 一 岩永 左衛門 | 一 同 菖蒲 |
| 一 猪の股 小平太 | 一 同 朝顔 |
| 一 土肥 彌太郎 | 一 同 白菊 |
| 一 義經の妾 靜御前 | |

本舞臺都て鶴ヶ岡別當所の体爰に梅ヶ枝青柳桃園菖蒲朝顔白菊何れも下ダ髪模様物の着付
 古實好の侍女にて控へ居る此見得管弦にて幕明く(梅ヶ枝)申し皆さん聞しやんせ今小舎人

衆のお嘶しに此程遠き都をお呼下しになられたる源廷尉義經公のおもひもの静御前とおつしやるは都に於ても二人りとなし能く器量の白拍子と鎌倉中の噂と成り是非にけふは静御前を見ねばならぬと谷七郷の老若男女が見物に此鶴ヶ岡の境内は往來さへも止る程群集致すと申事物見高ではムリ舛ぬか(青柳)そりや其等でもムリ舛うみめ形テ斗りでなく才智勝れし女丈夫にて男子も及ばぬ器量よし承れば義經公のお胤を舍ておいで在りしを誰申上たるか頼朝公のお耳に入り舎せし胤も女子なれば助命なせ共男子ならぬとある嚴命に母御諸共鎌倉へ御召に成りしと申事(桃園)お目見得濟し其後は堀藤次殿へお預けに成られし内に月も満此程出産有りし所御運の末か御男子故兼ての仰せに我君の嚴命蒙り是非なくも(菅浦)安達三郎清綱殿早速見分に參られて出産ありし若君を惜なくも刺殺し由井ヶ濱邊へ流せしと承つた其時はかけ掛ひのない私共迄(朝顔)ほんに身の毛もよだつ程恐しひのと怖ひので終日ふるへて居り舛たがいか覺期と云乍静御前が其折の心の内は何の様ぞ譬へ方なふムリ舛る(白菊)世の常の女子では直に産所で血が上り必ず正氣を失ふ所早くも男子と悟られて思ひ切たは氣丈な事夫も跡の肥立も早ふ此程にてはあら血も納りけふ八幡宮の御神前にて法樂の舞を舞るよし静御前の身に取りては恨み重なる我君の御上覽をも厭ずよ能く舞を舞ると思へば不思議で成り舛ぬ(梅)兎かういふ内静御前がお見へ被成るでムリ舛う(白)今日ころは染くくと爰てお目もじ(皆く)致し舛うトばたくに成り向ふよ

り鳥帽子狩衣の社家出て來り花道にて(社家)ハッ申上舛る(梅)何御用にムリ舛る(社)工藤堀の御内室静御前を伴はれ只今是へお越しにムリ舛るト云捨て引返す(梅)お噂申其内にはや御兩家の御内室が(白)静御前を伴はれお越し被成るとあるからは(桃)是にてお出迎ひ(皆く)致し舛うト皆々出迎ふ詠へ出の唄に成り向ふなまぎの葉下ヶ髪打掛工藤の奥方静御前下ヶ髪好みの打掛形り柵同じく下ヶ髪打掛堀の妻にて出て來り花道にて静御前思入有て(静御前)源家鎮護の御神たる八幡宮の御別當に妙エなる聲に糸竹の調べもさゆる音律は(兩人)エ、(静)テモ奥めかしふ存舛る(柵)サアそれは(静)一しは華美を盡せし機舖に笹輪どこの紋有れば源二位殿と見受しが夫に相違はムリ舛まい(兩人)サアそれは(静)源二位殿の上覽なれば今日の舞の奏すまじ此儘下向致し舛う(なまぎの葉)デモ今日御神前にて法樂の舞を舞事を(柵)御祈誓有しに今と成り何故有て(兩人)舞れ舛ぬ(静)愚かな事をのたまふ入かな今日静が舞侍るは兼て御兩女知らるゝ通り義經公の御武運を八幡宮へ祈りの爲法樂の舞なれば源二位殿を初めとして大小名の見物あるは静が心に叶とぬ故折角お伴ひ被成しが折を見合せ又重て奏で舛るでムリ舛う(なまぎ)源二位公のお召に隨ひ鎌倉御所にて舞時ハ御身がお情蒙りし源廷尉殿へ濟ぬなれど是は左様な譯でいさく今日法樂の此舞は八幡宮へ祈念の舞跡見物の貴賤を論せず只一樣の見物なれば譬へ將軍家におはす其別に會釋も遠慮も入らず夫を舞ぬとのたまふは才智勝れぬ静殿に似合しからぬと存舛る(柵)男子も及ばぬ秀

才と尊に閉し静殿理のなき事は仰しやら給ひ今なきの葉殿の詞の通り源二位公のお召にて此場を舞給へ慰み者に成りし様申者もムリ舛ふが鶴ヶ岡の神前にて今舞給ふは静御前が則神へ捧る法樂其舞を見物致すによも妨げはムリ舛まい(なき)譬へ今日に限らず共神前におき舞給は貴賤を論せ見物は山の如くに群集して見物致に相違なき茲の道理を思召べいつにても同じ事ゆへ思ひ立しが吉日とお定め有て静殿是非に今日御舞候へ(静)成程此後舞とても神前故に見物が群集致すは同じ事さは去り乍今日はチト舞難ひ事有れば是非なふ進めに應ぢ舛ぬ(なき)シテ舞ひ難事と言は(柵)如何成る子細に(兩人)ムリ舛る(静)さればとよ其子細の舞の離子が不足ゆえ(兩人)何と仰しやるト合方きつぱりと成り(静)義經公の御武運を八幡宮へ祈りの爲我法樂と思ひしに斯歴々の方々が見物有ては後世迄人の嘶まに墜るゆへされば静が法樂は一世の曠の舞にまて容易ふは舞難ま既に其かみ都にて忝ふも内侍所へ召れま折は内藏頭信光殿に離されたり又神泉苑の雨乞にとまかも四條の木須原に離されて舞さふらうぞや今薄命に鎌倉の御不審蒙り母君諸共召下されて侍る由へ笛鼓の役人を召具せざると知り給へん余人は兎もあれなきの葉殿は幼より都にて小松殿に召仕れ和歌は更まり糸竹の道に委しひお方もへ申迄にはさむらはねと謠ふも舞ふも其矩の合されば見苦し頓て暇の出し上都へ登り常舞し業に勝れし離子を伴ひ再び東へ参りし折源二位殿の上覽にて静が一世の曠に舞ふべし先夫迄は今日の舞をゆるして給へれかし(なき)

スリヤと有ても静殿には(白)俄に舞を(六人)舞れぬとや(静)此程よりして一ト方成らぬ介抱請し御兩女も余の義なれば速かに領掌なせと是斗りは静が心に叶たる離子がなければ益なき事(なき)夫も俄の事ゆへに(柵)誠に當惑(兩人)致し舛るト困る思入此時上手襖の隣にて(重忠)アイヤ御兩女其御配慮には及び申さぬ(静)アノお聲は(梅)あれぞ秩父の(六人)重忠様ト序の舞の合方に成り上手より重忠烏帽子好みの素袍一本ざしにて出て來り真中に住ひ(なき)是はく島山殿御役目とは申乍(柵)今日の御警衛御苦勞千萬に(兩人)存舛る(重)工藤堀の御内室にも静御前を守護召れ參籠有りしは一チの大役御心勞の程お察し申○扱静殿御身には一別以來先は堅固で次郎重忠大慶にさむろうなり(静)島山殿も御健勝にてわらはに於ても何程かお嬉しお存舛る(なき)早速乍重忠殿今兩人が當惑せし(柵)委細をお聞(兩人)被成れ舛たか(重)如何にも只今次の間にて某委細承りしが静殿の仰せ有りしと近頃尤至極なり(なき)シテ又配慮致すなど(柵)仰せ有しはいか成る譯(重)其子細は静殿へ只今申を篤と聞れよ○いなる技藝も其業の合たる者が有ざれば必ず妙所へ至らぬもの都よりして手馴れたる嘶子の者を同道なし舞んといふは其業の妙所を人に見せん爲白柏子にて一天下へ名を知られたる静殿名を惜むは尤なれ某始終を承り實に感心致したり左れと今日法樂の舞を見んとて境内と立錐の地のなき見物此儘御身が舞れずば嘸やほいなき事ならん將又只今御兩女が當惑召るゝ趣きの大變事に至らんやもヨリ難き次第ゆゑ無事を思ふて重

忠が是へ出しは外あらず拙き業に候得共某笛の投を勤め又小鼓の鎌倉に並ぶ者なき工藤殿
 銅柏子と是も得手なる長沼殿が勤め申さんさしも無双の住人に對し堪能なくて舞よとは申
 兼たる事あれど工藤長沼島山の三士に嘶子を勤めさせ是非に一指奏であられよ(靜)此靜が法
 樂の舞の嘶子をお三方がお勤め被成れて下さるさや(重)如何にも(靜)ム、ト此内靜御前ぞ
 つと思入重忠詰寄り(重)如何に靜殿斯迄重忠詞を盡し御身に舞を進め申は御兄弟を御和順
 に致さん爲の慮り源廷尉殿の御身を思はゞ八幡宮へ法樂に今日舞を奏すよと貞操節義とい
 ひつべし手前の笛は兎も角も聞るゝ如く工藤長沼何れも名を得し堪能なり夫にても御身に
 は誓つて舞を舞れぬとか(靜)サアうれば(重)よしや其業鈍く共此鎌倉の大名を囃子になし
 て舞れなば其身の恥にはよもあるまじ(靜)サアうれば(重)但し夫でも不足なるか(靜)サア
 (重)サア(兩人)サアくく(重)篤と思慮して鎌倉の大名三人囃子となし心よく御舞候へ
 (靜)拙き靜が法樂の舞を斯迄群集して見物仕給ふ様子故一斯の曠と思ひ詰め囃子を擧擧致
 せしが賢者と言ふゝ重忠殿又風流に隠れなき工藤殿や長沼殿が囃子を勤めて給はるとは此
 身の面目はに過ぎざらば仰せに隨ふて拙き舞の一指を法樂の爲神前にて今日奏し候らはん
 (重)スリヤ重忠が詞に付(なき)けふの舞を靜殿(柵)お聞濟(兩人)被成るとや(靜)何しに是
 を否み舛うぞ(重)ム、夫にて我にも祝着せり(なき)何とお禮を申ろうやら(柵)有難(兩人)
 存舛る(靜)おニタ方が最前かお進め有りしを受引ず重忠殿のお詞に隨ひ舛たも余義ない譯

かまへて悪しお被思まじ(なき)何しに悪しお思ひ舛ふを最早時刻も近付ば(柵)靜殿まは片
 時も早ふお支度有て然るべし(重)我等は工藤長沼に用意有やう告げ知らさん(靜)左様なれ
 ば重忠殿(重)後刻樂屋で御意得申さん(なき)こらはは是か靜殿の(柵)イヤ御案内(兩人)致
 し舛ふト出の唄に成りなごの葉先に案内きて靜御前柵侍女六人付て重忠に會釋と與へ這入
 る合方きつぱりと成り與より祐經致治烏帽子素袍一本さしにて出て來り重忠の左右へ住ひ
 (祐經)重忠殿の(致治)段くどれお骨折(兩人)忝ふ存る(重)祐經殿にも致治殿にも最早委
 細をお聞ありまか(祐)如何にも只今承りまが流石は智辨勝れたる島山殿の扱ひにて靜女が
 得心なま是にて事無く相濟ば此上もなき無事の納りしたるが貴殿の知る如く内實手前が申付
 てなごの葉に斗らはせ只法樂の舞と申是へ召連参りしなれば定て手前を恨みつらん(致治)
 夫故貴殿へ頼みまお諭し既に先刻我君が殊の外御機嫌悪しく我をいみて舞を舞ずば討て捨
 よと烈まき命令梶原父子を除くの外皆手に汗を握りたり島山殿の御執成にて其場は事なく
 納りて首尾能舞を靜女が舞事と被成りしは誠に以て大慶至極(重)と云ふ者の未熟を笛な
 かく舞には及ばぬはやま(祐)鈍ひ鼓も何れもが(致)御承知なれば銅柏子も(重)御免を蒙
 り(三人)勤め申さんト爰へ與か近習侍出て來り(侍)ハッ申上舛(重)何事ぞムる(侍)我君に
 は殊の外お待兼の折柄に早靜女のお支度も整ひしとの事なれば疾く御用意被成るゝ様お
 せき遊ばしてムり舛る(重)委細承知致してムる左様ムらば祐經殿(祐)是は直に三人共

(致)イデヤ用意を(三人)仕らんと鳴物きつぱりと成り互ひに先を譲り合トト重忠先に祐經致治侍付て奥へ這入る合方禪流しにて衝立の陰を景久烏帽子素袍一本差にてそつと出て邊りへ思入有て(景久)豫て國色の聞へ高き静を身共が妻になさんと疾々思へど判官殿の寵妾なれば心に任せずうれ故君へ讒言なし先源廷尉から責亡しえかして後に手に入れんと思ひの外に鎌倉へ召下されしハ我幸ひ舞に事よせ營中へ彼れを留置云寄らんと斗れど夫も成就せず今度は君へ申上工藤をお先に漸く今日此別當所迄引出せしが是柄先が肝心要扇ヶ谷の我屋舖へ得心させて連て行く能手段を巡らした物だわへト此時上手ハ安西小平太下手ハ岩永彌太郎何れも烏帽子素袍一本差よて出て來り双方思入有て(安西)其御手段は景久殿の(岩永)御邸宅迄連行より(小平太)此場にて手短に(彌太郎)思ひを晴らす(四人)工風がムる(景)誰かと思へば景久と日頃同意の各方扱は今の問す語りを(四人)承つた(景)夫は面目なき次第でムるシテ手段な御工風とは(四人)申て見様か(景)如何でムるな(四人)イヤ申まいる(景)ハテぢらさずとト安西の肩を叩くを道具替りの知らせ(聞せて下されト此摸樣所作の切にて道具廻る

本舞臺都て鶴ヶ岡神樂殿の体本業の壺柏子にて道具留るトコイヤイに成る橋掛りハ重忠折烏帽子の片方を引上ケ白の大口白の直垂紫草の紐を付詔への笛を持出る祐經立烏帽子紺葛の袴とくさ色の水衣には紫たん胴の鼓を持出る致治立烏帽子紺葛の袴山鳩色の水干詔への銅拍子を持出て皆く順能居並ひ祐經床凡に掛り笛鼓のあしらひに成り橋掛より静御前白の着附白き袴割菱の縫ある水干にて皆紅ひの中啓を持出て來り真中へ留るまんむしゆうの曲といふ白拍子に成り静御前扇を持開き舞宜敷有て(静)「まづやまづ」のおだ巻くり返し昔を今になすよしもがな「吉野山峯の白雪ふみわけて入にし人の跡を戀しきト宜敷舞終り静御前正面に向ひ辞義をなす是にて道具知らせなしに廻る

本舞臺元の別當所座敷へ戻ると合方まらべも成り奥ハ静御前以前の形りに着替柵梅ヶ枝白菊付出て來り皆く宜敷住ひ(柵)静殿には御産後ゆへ賑御勞れにムリ外う(梅)暫時是にてゆるくと(白)御休息を被成ませ(静)柵殿には何柄何迄さらはに心をお盡し被下其お蔭にて法樂の舞を首尾能奏で外ハ有難お存外ると合方きつぱりと成り奥ハなぎの葉臺に乗せし紅白の羽二重を侍女四人に持せ出て來り能所に住ひ(なぎ)静殿賑お勞にムリ外う(静)なぎの葉殿には種々の御配慮被成て給る段御禮は詞に盡被外ぬ(なぎ)其お禮と此方より言ねば成らぬけふの法樂早速乍静殿へ御披露申は外ならず兼く噂に聞しより遙に優りし舞振りどて御臺様も大姫君様も殊の外御感心遊ばされ則御上みか下され物イザ有難く御受納あれ(静)是は恐れ多し事拙き舞を御賞美有て結構なる被下物よしな御禮願ひ上外る(なぎ)委細承知致し外たほんにわらはも今日の舞が首尾能濟迄ハ如何と案事侍りしが誠にお上みの御機嫌よくお執持を致したる其甲斐有ていふ斗りうお嬉しう存外る(柵)是も偏に静殿の舞

が勝れておぼすゆへ(梅)能き折柄にお目もせし(青)私共もともく(桃)又と見られぬ
 静殿の(葛)舞を拜見致し舛て(朝)冥加に余る身の仕合せ(白)能樂しみを致し舛て有難ふ
 (六人)存じ舛るト皆く(辭)義をなす静御前而目なき思入奥より景久出て來り(景)静女を初
 め女房達はに有しかト真中へ住ふ(なき)景久殿も静御前の(柵)舞を御覽被成舛たか(景)見
 た段か(姿)と云ひ舞と云ひ秘曲を盡す絶妙に思はず見入て我を恐れ幾度となく手を打た
 り夫は格前御臺所が早御歸館に候故何れもには片時も早くお見送りを致されよ(なき)スリ
 ヤ御臺様には御歸館とや(柵)左様成ば静殿暫く是に(静)何卒よしなに御禮を(なき)畏り舛
 た(柵)イヤお見送りを(六人)致し舛ふト唄に成りなごの葉先に柵女形皆く(奥)這入る跡
 に景久つぎはなき思入にて(景)静殿應御退屈にムらう何か用事があらば遠慮なく手前に仰
 せ被成たがよい(静)有難ひ其お詞必ずお辨ひ下さり舛なト景久早く四人が來ればよいとい
 ふ思入此時上手の以前の大名四人瓶子土器を三寶に乘せ持て出て來り(安)景久殿是に有り
 しか今日八幡宮へ備へし神酒(岩)静殿に頂戴有る様(小)進めくれよと我々へ(彌)神職方々
 頼みでムる(景)夫は近頃御苦勞千萬イヤ静殿頂戴致されよト三寶に乗せし土器を静御前の
 前へ直す(静)是はく有難ふ頂戴致し舛るト土器を取上る安西酌をして静御前頂き呑む景
 久思入有て(景)其土器は手前が頂戴致し度い(安)ハット取次景久の前へ持て來る岩永酌を
 する景久土器を持思入有て(景)静殿此土器は忝く頂戴致すト宜敷呑于(安)まづ是にて大法

の盃事も相濟たり(岩)是柄は景久殿がお手に入れるは碗前次第(彌)早く趣向が(四人)拜見し
 たいなト早く言へと進ることなし景久と言出を兼る思入此内静御前も思入有て(静)最早當社
 に用なきわらは是か下向致し舛る何れも御免ント立上るを留て(景)先待れよ静殿(静)何ぞ
 御用でムり舛るか(景)別に用事もムらぬが今御身が立時は此座の花を失ふ道理何と各く
 左様ではムらぬか(安)いゝ様折角神職より神酒を賜りまだ一順(岩)御相伴を致さねばせめ
 て我く一献づ、(小)静殿と同席にて心能く頂戴なし(彌)夫にて納盃仕れば御迷惑でも今
 暫く(景)是はまたり各く静殿は早過されぬと言れば必ずお進め御無用くイヤ兎角上
 戸と申者は過せぬ者に無理じいを致すがくせでムれ共うことを救ふが粹といふもの然らば殘
 らず手前が引受御身の名代仕らう其替り景久が静殿へ頼みがムるが夫を聞て貰ひ度い(静)
 シテ静へお頼みとは(景)其お頼みは〇ト云兼るを四人の大名早く言へと云ふ思入景久余義
 なく(其お頼みは別義でムらぬ御身が自筆の三十一文字戀歌を詠じて貰ひ度い(静)エ戀歌
 の御所望とは(景)直に申も而目ないが何を隠う其はぞつこん御身に惚申た(静)エ(景)
 主しある御身へ懸想なすは言すと知れし不義也へに驚怖召るも尤乍心をまづめて景久が申
 をとつくりお聞下され〇義經公は奥州へ落る途中で擒と成り辨慶初め四天王殘らず討れた
 と申事(静)エ〇夫は誠でムり舛るか(景)如何にも(静)シテ奥州は何れ何國で君には討れ
 給ひしぞ(景)サア其奥州は何れで有たか(静)定めて達しはありつらん夫を礎と御存なきや

(景) サアツイ事多く失念致した○ト間の悪きこなし静御前思入有てずつと立上る景久留て
 「コリヤ何れへムる(静) 我身に取ては大切なる義經公が何れ何國で討れ給ひし事あるか
 御身が失念せしとあれば秩父殿か工藤殿にお目に掛つて承らん(景) イヤ其義は暫くお待下
 され(静) テモ聞捨に成り外ぬ(景) 實は街の風説なれと義經公は叛逆の企有て我君の御不
 興受し上柄は再び此世へ出られぬ故よしや存命なれば迎近きに落命有るは必定夫に義理立
 召るのは益なき事ゆへ景久に其身を任すが上分別夫とも得心ムらぬか(静) 何様仰せらるゝ
 共此お返事は成り外ぬ(景) 此景久に隨日ねば御身が命はあらざるぞ(静) 夫は何ゆへ有ての
 事(景) 最前御身が諷ひし今様とや終らんとせし折に彼の祝言の君が代を諷ふ事かと思ひの
 外まづやまづぐのをだ巻くり返し昔を今になすよしもがな昔を今になすよしもがなと申
 さば則我君をないがしろにする其詠歌以外の外の御立腹すでに死刑の御沙汰有るを我父平三
 景時と此景久が申あだめ君のお怒り慎めたり斯迄情ケを盡するは御身を妻に仕たいゆへサ
 ア色よい返事が生死の境○か程申に黙し召るか命を捨てても不承知かツア得心か但しはいや
 かツアくく相成るべくは命の助る色よい返事を聞してくりやれ(静) ヤア詞が過る梶原
 景久わらには對して失禮成ぞ(景) 何失禮とは(四人) 何故に(静) 義經公をお身等何人成り
 と心得居るぞ(五人) 何と(静) 忝くも左馬頭義朝公の九男にして源二位殿の御連枝なり汝が
 父の景時初め皆源家の臣下ならずや廷尉の君も是正に御主人にて有りつるぞや殊更兄君餘

倉に今權勢威し給ふ誰がかげと心得ある蛭が小島に御旗を開かれしかど其折に關八州の
 人心を計り兼給ひし故竟に平家を討事ならず木曾義仲に先を越れ舉を握らせ給ふ事聞と等
 しく義經公與羽を跡に御出馬有て駿州浮島の陣に走せ付一ツ方の將として木曾の強敵を討
 亡し續いて一ノ谷鴨越を逆落しに十万余騎の堅城を一舉に破り八嶋責檀の浦の一戦に平家
 の根を斷葉を枯し直ちに三種の神寶を都へ逆幸し奉り頓に四海の逆浪を鎮め玉ひし故にて
 そ其勳功をも賞せられず讒佞の詞を信じ給ひ現在骨肉の我君を憎ませ給ふは何事を譬へわ
 らは、妾にせよ義經公の御胤を此身に合せし靜なり臣下の身にて御連枝のお情受しわらは
 へ對しあられもない事を申は身の程知らぬ不禮もの失禮なりと申せしが此靜が誤りなるら
 景) サアそれは(静) 汝等が失禮なるか(四人) サアそれは(静) 以後を屹度慎まれよト靜御前
 思入有て急度いふ景久四人顔見合せいましきこなし(景) そう聞上はト立上る此時與方
 以前の重忠ツカくと出て此中へ這入り宜敷留て(重) 景久殿お待被成れ(景) ヤ貴殿は次郎
 (四人) 重忠殿(重) お暇出し靜女を何と召るゝ(景) 過急に只今用事有て御前へ伴んと存せ
 し所(重) シテ御前へは何用有て(景) 先刻の詠み歌を御立腹ゆゑ詮義の爲(重) あめ詠歌こそ
 夫どを思ふ女の情ツにかなへりと政子の御方言上なし君にも御機嫌直されしに又改めて御
 詮義とと(景) ヤ(重) 彼れ一條に付御詮義なら囉子を勤めし工藤長沼此重忠にも御沙汰が有
 りまか(景) サアそれは(重) 返答ならずば景久殿暫く夫にお扣へ被成れ○ト景久惡ひ者が來

たといふ思入にて四人と顔見合せ抑へる重忠靜御前に向ひ(靜殿にはまだ是に居られまか(靜)是はく秩父殿先刻は段く御苦勞にムり舛た爰へ與ふなきの葉柵出て來り景久四人見て(景)追く(邪)が(安)イヤお邪なれば賜りま(岩)是成る臺の品々は(小)我々四人が(彌)預り申さん(なき)イエ夫には及び舛ぬ(柵)わらはが持參致し舛る(なき)靜殿嚙御待久まふ居給はん(柵)イヤ御同道致し舛ふ(靜)左様なれば此ま、に(重)障りのなき内ト早く歸れと云思入(景)デモ此儘に歸まてはト立掛るを重忠留て(重)イヤお暇出し上柄は(兩人)少々も早ふ(靜)下向致すで〇ト會釋するを木の頭(ムリ舛るト辭義をす景久立掛るを重忠是を留る此摸様皆く引張り宜敷三味線入亂れにて柏子幕

五幕目大詰

羽州佐藤接待の場

- | | |
|-----------|-----------|
| 一 源九郎 義經 | 一 駿河治郎 經清 |
| 一 武藏坊 辨慶 | 一 常陸坊 海尊 |
| 一 龜井六郎 重清 | 一 増尾權の守兼房 |
| 一 片岡八郎 經俊 | 一 鷲尾三郎 經春 |
| 一 伊勢三郎 義盛 | 一 熊井太郎 忠基 |

- | | |
|-------------|------------|
| 一 杉目小太郎 行信 | 一 繼信の一子 鶴若 |
| 一 既喜三 太清悦 | 一 忠信の一子 龜若 |
| 一 佐藤の後室 教信尼 | 一 佐藤の臣 軍藏 |
| 一 繼信の妻 淺香 | 一 同 伴藏 |
| 一 忠信の妻 麻生 | 一 同 新吾 |
| 一 兒 金剛丸 | 一 同 藤内 |

實は 卿の 君

本舞臺一面の平舞臺上の方に扉を開きし冠木門此向ふ綱代堀後口淺黄幕門の傍に山伏接待といふ高札を建都て出羽の國高畑佐藤邸宅門外の休爰に藤内新吾伴作筒袖小袴一本差家來の持へにて立掛り居る管弦の合方へ礎を冠せ審明く(新吾)當家の後室教信尼様は繼信様忠信様の御追善の其爲に山伏接待と云札を建て羽黒山へ參詣の山伏をお泊被成舛るは誠に大功德な事ではないか(伴作)如何にも功德な事されど御追善の爲成らば奥羽の靈場巡拜さす佛道修行の旅僧をなせお泊被成ぬか山伏斗りの接待は何ぞ譯のある事かな(藤内)是には深ひ譯が有て繼信様忠信様が主君と頼みし源廷尉義經公の識者の爲に山伏と也奥州へ下り給ふと申事實はそれを侍受に被成し事であるそうな(軍藏)後室様がお待兼ゆへ一日も早く御主従が是へお出被成ればよいがハテ待遠な事でムるト皆く内へ這入る是にて上手出

語り臺霞幕を切て落し爰に竹本連中居並ひ淨瑠璃に成る「如月の十日の夜半の入方の月諸
共に義經公都を落て越路瀾散り行梅の加賀の國安宅の關も安くと越へて出羽の佐藤の館
構へ間近くあゆみ來てト此内螺の音小鼓をあしらひ向ふか義經撫下ケ鬘頭巾篠掛水衣小袴
馬手差附太刀草鞋山伏の拵へにて出て來り海尊白髮鬘頭巾篠掛水衣達付草鞋駿河龜井同じ
拵へにて出て來り跡より辨慶坊主鬘頭巾篠掛水衣達付草鞋誂への笈を脊負ひ金剛杖をつき
出て來る皆く花道へ留り(義經)如何に海尊見ればあれなる門外にいかめしき立札に山伏
接待と記しあるは汝等如何思ふぞや(海尊)惣じて旅行の修行者へ接待とあるなれば世にな
き人の追善に施しなすと思ふべけれと山伏のみに接待とは心得難き立札なり(駿河)海尊殿
の言はるゝ如く正しく是は我君を止めん爲の接待にて鎌倉の内命ならん(龜井)さすれば
一泊なすとも御休息もいと危し是は跡へ取て返し道を違へてお出あるが然る可かと存舛
る(義)方くの意見尤なり我も疑念をかもすれば一存には決し難し辨慶汝が所存の如何に
(辨慶)抑く湖水を船にて渡り海津の浦へ着てよりは是へ參る道くも所々に構へし新關に
て判官殿よと怪しめられしも詞を巧みに云解て出羽の國迄參りたり今山伏接待と立札のあ
る此家へ斯く山伏の姿にて立寄らずして過ぎ行ば怪敷者と疑はれいか成る變の在らんも知
れず先ッ何氣なく羽黒山の山伏の体に云なして一泊あつて然るべきかと此辨慶は存申(義)
何様是は辨慶の申詞に隨んもし鎌倉の内命うけ搦捕らんと其爲に是に設けし接待ならば立

寄らざれば追手を掛ん兎にも角にもあれへ參りて其場のしぎに致すべし(海)成程是も御尤
然らば此家へ立寄て篤と家内の様子を伺ひ御止宿有て然るべしト螺の音に成り向ふか金剛
丸切髪水衣一本さし兒の拵へにて出て來る續いて伊勢三郎太郎片岡喜三太小太郎權の頭何
れも同じ山伏の拵へ權の頭笈を脊負出て來り花道に留り(金剛丸)歩行み馴れざる驛路に殊
にけはしき山道ゆゑ道を遅れてムリ舛る(伊勢)北の方には唯ならぬ御身故にゆるくとお
運び有様御厭ひ申(三郎)夫ゆゑ四五丁遅れしも君と一つにあらざるやう(太郎)誰と間を隔
てしは旅人の人目を憚る爲(片岡)され共道く人々が心のせへか怪しむ様子(喜三太)誠羽
黒の山伏が(小太郎)東國修行の体に見せ(權の頭)漸く是へ參つてみる(辨)北の方には嘸
お勞れ幸ひ向ふの接待にて御休息被成ませ(金)スリヤ我君には(七人)接待所へ(義)仕義に
寄りなば舍る所存(海)左様ムれば(皆く)片時も早く(義)方く來れ(皆く)ハア、「螺
の音高く吹立て先達扉へ立掛り(辨)是は羽黒山の山伏にて東國修行に出し者接待とある立
札に暫く様を貸下され「音なぶ聲に門内より以前の家來立出て(軍)仰せ迄も候はず山伏衆
にムるあら(藤)接待故に御遠慮なく打通りて休息あれ(新)日も西山へ傾きて最早夕景近け
れば(伴)何れへムるか知らね共一泊有て苦しからず(辨)それは千萬忝し殊に寄なば今宵の
舍りを當家へお願ひ申でムらふ(藤)此由奥へ傳へられよ(兩人)心得てムるト新吾伴作門の
内へ這入る(軍)イヤ山伏衆には(兩人)とくくあれへ(辨)然らば何れも(義)スリヤ接待の

(皆々)設ケの席へ(辨)心置なく通り召れ「大先達を初めとして順序を正して門内へ打連れ
てこそト軍藏藤内先に立辨慶先に海尊義經金剛丸皆々門の内へ遣入る跡調べにてつなき能
程に知せに付上手冠木門綱代塀を引取り釣枝を引上ダ土塀を三ツに疊み日霞へ引上る
本舞臺都て佐藤の館接待所の体床の三重にて道具納る「入にける爰に佐藤庄司が後室教信
尼が都より山伏となり陸州へ判官殿の下向と聞き門に山伏接待と高札立て御入りを待設ケ
たる一搦へ家來が知らせに一間より鶴若龜若立出て(鶴若)先刻より待設けし(龜若)山伏衆
が御入來とな(新)羽黒山の山伏衆が參られ舛てムリ舛る(鶴)シテ其人數は(龜)何人なるぞ
(伴)以上拾二人ムリ舛る(鶴)夫ぞ正敷我君ならん(龜)疾く是へ(兩人)お通し申せ(新)
ハツト橋掛りへ向ひ(イッ)山伏衆には御遠慮なく(伴)是へお通り(兩人)被成ませト橋掛
の内にて(辨)然らば御免(皆々)下されい「家來が案内に先達の跡に付添ふ人くはいの
なる設ケあらんかと心を配る奥の間々繼信忠信兩人の妻へ立出手をつかへ(淺香)是はく
山伏衆には能ふこそ御入來被成ました出羽の國は山道多く無かし御難義にムリ舛ふ(麻生)
御覽の如く門前へ接待所の立札致し席を設けてお待申せば草鞋を解とくく是へ(淺)お通
り被成て(兩人)下さりませ(辨)いかにも仰せに任すでムる〇何れもよも草鞋を解き是にて
休息致されい(皆々)心得てムる「心ならねと先達の詞に皆々くわらんじ解塵打拂ひて奥
口を見廻し席に付ければ奥方は從者に打向ひ(淺)コッヤ其方共は山伏衆のわらんじを取片

付い(四人)ハツ(麻)用事あらば呼ん程ふ部屋へ參りて扣へて居や(四人)畏ッてムリ舛る
「從者ハ草鞋携へて垣の小蔭へ入にける(淺)唯今從者へ仰せあるを小蔭で伺ひ舛たるが
(麻)何れも方には羽黒山の山伏衆にムリ舛るが(辨)如何にも當國羽黒の修驗者斯く申某は
大先達荒讀岐(海)又某は小先達常陸坊(義)我等事は大和坊(龜)席に連なる我くは河内坊
(伊)和泉坊(駿)山城坊(權)近江坊(三)信濃坊(太)但馬坊(片)攝津坊(喜)播磨坊(小)長門坊
(義)其余は是なる兒一人(郷)金剛丸と申舛る(辨)何れも是か東國を修行を致す山伏にて
(海)人數は以上十二人(駿)追福作善の爲成るか(龜)接待とある立札に(伊)暫く是に懸ひ舛
(權)御厚志の段(皆々)忝なし「禮義を厚く辭義なせば二人りの子息はさかしくも(鶴)母
上達には客僧方へ(龜)お茶をまいらせ給ふべし(淺)是は三ツ子に淺瀬の譬へ(麻)お茶まい
らすを念れしぞ「云つ、傍への爐邊により心の花香汲とりてしづく君の御前と北の方へ
さし出し(淺)龜末の茶にはムリ舛るが(麻)召上りて下さりませ(義)先ッ是は拙僧より大先
達小先達兩僧へ出されよ(淺)仰せではムリ舛るが我君様と北の御方様へお先へお茶を參らせ
よと(麻)我母上の詞に任せ先達殿を差置て捧げ舛てムリ舛るト義經皆々く顔見合せ思入
辨慶うなづき(辨)イヤ是へ參る道くも所くにて斯様の事ありしが中にも加賀の安宅の
關にて判官殿主從なりと關守戸樞左衛門に疑れし事有りしが又此家にて判官殿主從なり
と見違ひられしが(淺)左様にお包み遊ばせと判官殿御主從十二人の山伏となり此陸奥へ下

り給ふと疾より街に噂高く誰存せざる者もなし(麻)夫故是へ設の爲に山伏接待といふ立札なし當所へお出遊ばすをお待申てムリ舛る(辨)夫は如何成る見違へなるか元我くは主従成らず羽黒山の山伏なり○事に紛れて問はざりしが斯く接待せしめる當家の主じは何人なるぞ「嘶しを余所に尋ねれば(淺)此家は佐藤庄司の邸宅當時は後家の教信尼が是に住居あり舛る(辨)スリヤ佐藤殿の邸宅なりしか(義)シヤ是成る二人りの少年は(淺)佐藤三郎兵衛繼信が伴(鶴)鶴若と申舛る(麻)又是成るは四郎兵衛忠信が伴(龜)龜若と申舛る(金)扱の二人りの女性達は(淺)其繼信が妻淺香(麻)忠信が妻麻生と申(兩人)不束者にムリ舛る(海)源家の臣にて勇士と呼ばれし佐藤繼信忠信殿の妻女子息でありしと「扱は繼信忠信が母の住家でありたるかと人く顔を見合せて誓し詞もなき折柄ト皆く宜敷思入此時上手にて(教信尼)お尋ねありし佐藤が母只今お目見得仕らん○「一間の内より立出る佐藤が母の教信尼齡積りし頃の雪櫃の波やうちかけの衣の蕪りも奥ゆかしくしづくお前に手をつかへ(先達てか風説に義經公には都より主従山伏姿にて此陸奥へ十二人御下向有りと承りけしかあすかと御入りをお待申せし私は繼信忠信の母にして教信尼と申舛る夫トを初め兄弟の菩提の爲に髪をろぎ今佛門の徒となりし憚りある身も願りみず御前間近く立出しも世になき伴兩人が御仕へ申せし我君と思ひ舛ればひたすらにかなつかしく存舛ゆへ斯くお目通りを致し舛る無禮の段幾重にも御許し被成て下さりませ」いふを辨慶打消して(辨)最前かして

判官殿主従成りと申さるゝは夫いそなたの思ひ違ひ全く羽黒山の山伏にて五人三人東國へ別れく修行なす者接待故に此處へ調度人数も十二人寄り集りまを判官殿主従なかとは何を證據にあまり愚かな事でも(教)斯く接待を設けしも現世此祈りの爲にもあらねば後世を願ひの爲にもあらず頼みに思ひし二人りの伴兄繼信は八島にて能登守が矢先に討れ又弟の忠信は都に於て北條の討手の兵に取圍まれ自殺せしと申事風の便りに聞しのみにて委しき事を知らざれば○「一人り身にしむ袖の雨晴れぬ思ひをなぐさむ爲門ト外へ立札なし此接待を初めしなり(世)の謬も親子より又主従の契りこそ深きものと申舛れば定めて哀れに思し召れん殊更君の御爲に一命捨し郎等の一人りの孫を不便と思し給へらばなど我君には御名をば御名乗り被成て下さりませぬ「アラ恨めしの浮世やと老のくり言教信がのこち歎けば共く二人りの嫁も又孫も泪にくれれば人くも思ひぬ袖を濡しける辨慶左こそと察しやり(辨)忠義厚く君に替り一命捨し兩人の母を初め妻子等が斯く迄歎くを余所になしお名乗なきのは御不仁なり(駿)せつある心中御察しあつて(龜)御名乗り被成て(皆く)遺はされい(義)今は何をか包み申さん大和坊と申せし我は教信尼が察しの如く源九郎判官義經なるぞ(郷)又兒金剛と申せしわらはは君の妻なる郷の君(辨)大先達の荒巖岐は武藏坊辨慶(海)小先達の某は常陸坊海尊(龜)又我くは四天王龜井六郎重清(駿)駿河の次郎經濟(伊)伊勢三郎義盛(片)片岡八郎經俊(三)鷲ノ尾三郎經春(太)熊井太郎忠基(喜)厩喜

三太清悦(小)杉目小太郎行信(權)増尾權の頭兼房(海)何れも君の御供なし是を奥州秀衡殿を頼みに下向致すなり「義經公を初めとして皆く本名打あるせば教信尼は打悦び(教)能ぞ御名乗り被下舛た是にて改め我君へ嫁女も孫も御目見得せよ(淺)かゝる邊土に生立ば生涯君の御目見得は(麻)叶はぬ事と存じ舛たに計らず此家へ御入り有て(鶴)斯様に御目見得致し舛るは(龜)私共の身の仕合(教)冥加至極に(五人)ムリ舛る「有難泪にくれば義經公も御機嫌能く(義)我を設けの其爲よ斯接待をさせしとあれば疾に姓名名乗るべきを能と包み隠せしは梶原父子が讒に寄り兄頼朝の不興を請浮世を忍ぶ此義經夫ゆを包み隠せしなり情を知らぬ者なりと必ず我を恨むまじ(教)此儘御名乗り下されずばお恨みも申舛ふが斯様にお名乗り下されば何をか恨み申舛ふ只今嫁が申せし如く日本の内でも片隅なる出羽の國に住なせば生涯お目見得ならぬ身が斯様にお目見得致し舛る私共の幸ひは君の御身の御不幸にて平家の一門亡びし給ひし其大功も水となり鎌倉殿の御連技たる重き御身を輕み敷草鞋を召しそこはかと物憂き旅の御艱難取分て又いたわしきは是にまします北の御方都の内をも容易にはおひろひ被成れぬ御身の上を男妾に出立て山路をおひろひ被成舛るは嗚御難儀にムリ舛ふ(郷)能ぞ尋ねてくれたるを君と諸共都をば出し折には物憂かりしも附添ふものに慰さめられきのふと過て此頃は草鞋さへもはきなれてさのみ難儀にあらぬわんの(淺)今更返らぬ事ながら繼信殿か忠信殿が御供致して居り舛れば(麻)所の地理を存舛れば

御案内に成り舛ふに残念な事でムリ舛(教)ヲ、嫁女達といふ如く此御同勢の其中に繼信忠信兩人が居つた事なら嬉しからふに今は世になき二人りの兄弟〇是に付ても繼信が八島の浦にて最期をとげしも正敷君の御身替に忠死なせしと云ふ者あれば不覺を取て死したりといふ者有て何れも世の風説に分り難し定めて其場の有様を何れも方には御存ならん母はもとより二人りの妻血の余りなる此孫へ最期の折のあらましをお聞せ被成て下さりませ「老女が頼みも尤と義經公のうなづき給ひ(義)八島の浦にて繼信は我に替つて死したるが夫が誠の事なれば老母を初め妻子の者へ心ゆかしに其場のあらまし辨慶これにて語り聞せよ(辨)委細長つてムリ舛る〇「君命請て辨慶は威儀を改め座を進みト辨慶腰にさしたる扇を持宜敷前へ出て(扱)も其日の合戦は然も午の上刻に平家方に名を知られし門脇殿の二男なる能登守教經が舟端に立上り〇「一院の御使檢非違使五位の尉源九郎義經に中ざし一筋まいらせん受て御覽候へと五人張に十三束打つがいてを待かけたり(聞)及びたる強弓に〇(味)方も心おくれかたれたふひまに繼信は(心)まさりし剛の者〇「忽君の御馬前へかけあさがりて鞍かさば鑑踏張り立上り(源)九郎義經是に有りとはつこと笑つて扣へしは〇「天晴勇くしき有様あり(扱)其時に教經が〇「引設けたる弓なれば矢盡をさして射かけしを太刀扱はなして切り拂はば(教)經いらつて三度目に「ひやうと放せばあやまたず(着)せし鑑の胸板より「後〇へすつばと射通したりト辨慶宜しく物語の思入教信尼も思入あつ

て(教)スリヤ繼信は教經がその矢に胸を射られしとか(淺)シテ、其時我夫に如何被成れましたるぞ(辨)サ、其時に繼信は灸所も屈せず馬上にて乗り直さんとせしかども「大事の痛手に堪へかね馬よりとうと落にけり(教)其折弟忠信は君の御前にあらざりしか(辨)ヲ、御前にありて教經が家臣童の菊王丸繼信が首のき取らんと〇「かけよる所を忠信が「敵の片とれどさんなれと切て放せし其矢にてまつた、中を射通され(かつばと轉ぶ菊王が首をば敵に討せざと〇「教經舟より飛でありわだぐみ擱んで船へ投入終に空しくなつたりける(折しも汝の引時に次第く敵方の「舟のゆられて遠ざかり其日軍は夫迄に(兄繼信が敵をば眼前とりしハ大手柄と「感せぬものこそなかりけり(教)能登守が家臣なる菊王丸を忠信が討しは兄への手向なり繼信事も我君の御身代りに立しとあれば今世後世の面目なればさらく悔む所なし淺香も嬉しく思ふであらふな(淺)只討死を致してさへもの、ふの身の譽れなるに我君様のお身代りに立しとあれば天晴故決して歎きは致しませぬ(鶴)父上が御手柄被成し故跡へ残りし私が肩身が廣ふムリ舛る「流石は武士の育とて妻子も共に討死を悦ぶ心ぞけなげまれ義經公は老母に向ひ(義)八島浦にて繼信が今はかうよと見へし由へ云ひ置事のあるならば必置なく申せよとくれく尋ね問ひし時〇弓矢取る身は其君の御身替りに立事は三世の御恩を報ずる事故露より輕き命をばいかでか惜き事あらん心に掛るハ故郷に七旬に及ぶ我母と十にままる一子あり〇「只これのみが不便なりと心に掛る浮

雲の月を覆ひて光りをば失ふ如くをれく、と遂に空しく成り果れば並居る者も哀れを知り鎧の袖をひたしける(此義經が忠勤を盡す誠が曇らずば晴て治る世に出で繼信忠信兩人が子孫の者を尋ね出し命の恩を報せんと思ひし事も空しくなり我人かゝる姿にて憂世の中を忍ぶ身に其名をばにも名乗り得ぬ我はかなさを推量せよ(教)ハ、冥加に余る其仰せ泉下に於ても伴等が悦び居るでムリ舛ふ(辨)今教信殿の申如く御身替りに立たるは人もうらやむ手柄も(皆)必ず歎く事なかれ「皆繼信が手柄をと譽るに付て忠信が妻子は夫が羨しく(麻)申母上繼信殿のお手柄を聞に付ても我夫の忠信殿は都にていか成る事で自殺有りしか連添ふ妻の身よ取ては心も心なりませぬば忠信殿の最期の様子お尋ね被成て下さりませ(教)ヲ、尤成るそあたが頼み〇辨慶殿には忠信が最期の様子御存なら語りてお聞せ下されい(辨)忠信殿が最期をとげしは某其場に有合さねば語り申さんよすがなし「いふに義經詞をつぎ(義)忠信事は繼信におとらぬ忠義ハ吉野にて大衆が我を討んとて横川の禪司覺範が大將となり一山の悪僧ばらが取圍めば容易に其場を退れ難く進退極り討死なさんと既に覺期をなしたる所へ遅ればせに忠信かけ付某これにて殿りなせば我甲冑を賜りたしと強ての望みに止むを得ず六具を彼れにわたへしぞ「それを着して踏とよまりと語り給へば海母が(海)蹴抜ケの塔の邊りにて寄せ来る大衆に打向ひ〇「清和源氏の嫡流たる源九郎判官義經是に有りて名乗りを上げ必死の戦ひなせし上大將横川の覺範を事の見事に討取れば(勇氣

に恐れ大衆等へ○「梢を落す夜嵐に降積む雪の散る如く散乱なして逃たるゆへ(其間に我君危急を退れ東大寺迄落延たり(伊)忠信殿も敵なければ落行君の御跡したひ○「密に都へ出たれど鎌倉殿の詮義嚴敷互ひに忍ぶ身の上(遂に廻り逢ずして「四條通りにゆかりある小柴が許に年を越しまかも正月六日迄(暫く隠れ忍びしも終に露顯なしたるよし「語る詞の尾を繼で(駿)ヲ、其事は聞及ぶ鎌倉殿の嚴命にて都へ登りし北條父子へ内通なせし者有て俄に寄せ来る討手の者○「忠信殿は日頃より好める酒に熟醉なし枕につけよ由断なく(込み入る人数に目をさまし○「かたへに有合ふ基盤を取り万夫不當の勇力にて弓手馬手打なぐれば邊りへ飛散る基石と共にばらくくと逃ちつゝあり(去れども味方のあらざれば露は衆に敵しがぬく(龜)逆も一命捨るなら一度君の御座所なる堀川御所にて相果んと○「追ひ来る討手を吉野にて給はる源家の名刀にて切つて廻れば電光の光りに血汐の雨降りて寄附く者あらざれば(心静に堀川へ至りて一息ついたる所へ江間の小四郎入来り○「斯く敵となり味方となるも主命なれど是非もなし(多くの人命断んより切腹されとの一言に實に尤と忠信殿○「腹十文字にかき切て勇々敷最期をどげしゆへ(敵も忠義を感せしとぞ「替るく(此物語りに教信麻生の打悦び(教)扱と忠信も吉野山にて君の御名を我身に名乗り寄せ来る大衆を討し上御跡慕ひ都にて切腹せしとは天晴ありしぞ(麻)道隔たりし事故に委敷事が知れざれば心に掛るは兄止が八島の浦にて我君の御身替りに立去大功うれに引替忠信

殿が卑怯な働き被成れしかと明善案事居り舛たが物語を承り誠に安心致し舛た(龜)父上様は伯父様に負ぬ手柄を被成しとは嬉しむ事でもり舛る(淺)是にお出の皆様を見るに付ても思ひ出され(麻)心の迷ひか此中に居られ舛かと思れ舛「二人りの母が歎くをば子はさかしくも勵まえて(鶴)二人りは母様お案事被成るな亡キ父上の替りには是より二人りが我君様へ(龜)お仕へ申て忠義を勵み二代の家来と言ふやう御奉公を(兩人)致し舛る(伊)蛇は寸にして其氣ざし有と流石は勇士の胤程有て末頼母敷二人りの少年我君お譽下さりまじふ(義)コリヤ兩人共に是へ来よ(兩人)ハッ(教)夫我君のお召しゆへ(淺)庵相さきやう(麻)お傍へ出よ(兩人)ハア、「育正敷しとやかに御前間近く扣れば義經二人りの顔打詠め(義)ハテ親子とて兩人が世になき繼信忠信よ斯迄よくも似る物かな○いまだ幼年の身を以て親におとらせ忠義を勵み仕へんといふ志し我に於ても嬉しきゆへそち達二人りへ與る物あり○それなる鎧と太刀を是へ(權)ハッ畏つてムり舛る「傍への笈より取出す鎧布に包みし太刀をうへ君の御前へ差出せば(義)今主徒とある其印に此義經が義といふ一字を二人りの者へ與へ兄と佐藤三郎義信弟は佐藤四郎義忠と名乗るべし(教)ハ、思ひ設けぬ二人りの孫へ御名を下し給はるとは冥加に余る身の仕合せ有難存じ(五人)奉り舛る(義)又此鎧此太刀は吉野山にて忠信へ我甲冑を與へし折取替たりし二品なるが鎧は八嶋で討死せし兄繼信が着せし由太刀は忠信が所持なれば鎧は兄義信太刀は弟義忠へ今改めて與へるぞ(教)ハッお名を

下し給はるのみか親の紀念の遺物迄御譲り下さる御恵み御禮は詞に(五人)盡され舛ぬ「仁愛厚き義經が恵みを拜し人々有難涙にくれにける(淺)幼年なれども我君にお名を賜る上柄は(麻)今日よりして二人りとも源家二代の御家來なるぞ(鶴)ハ、有難き御賜物今より我は三郎義信(龜)又私は四郎義忠(教)此御恩をば忘れず君の仰せを肺腑に銘じ若君様は御代迄も忠義を勵みて後代の青史よ其身れ美名をとめよ万一身性の振舞せば父に劣りし臆病者よと二人りが竹馬の友だちに後指をさくれなば佐藤の家の瑕瑾なるぞ(鶴)うのば、様のお詞を「肝よるりつけ成人さし軍があらば御馬前にて命限りに取ひなれ(龜)もし御大事と見るならば「向ふ敵をバ引受て御身替りよ打死なし父におとらね忠臣と(鶴)末世に譽れを(兩人)殘し舛る(辨)ホ、勇まし、其身の器量と詞に顯れ末々、天晴勇士と成り君へ忠勤勵むは必定(海)能き御家來が二人り出來君にも嗚かじ(皆)御悦び「祝す詞に義經は過ぎしかたを思ひ出(義)幼き者が行末を頼む甲斐なき此義經父の仇をば報せんと鞍馬山を出しより○「或ひは野伏し山に伏し危き風波の難を凌ぎ(是迄數度の合戦よ身命を投打つて平家の大軍を討亡せし其大功も水となり讒者の爲に隔てられ遂に浮沈の身と成りて多年の粉骨碎身せし臣下の者へ尺寸のさい地も與へず諸共に汚名を取らせし口惜さ恥辱を忍び惜からぬ命を今日迄うばいしは一度讒者の旨を正し臣下の者へ聊の賞祿を與へん爲斯くい思へど夫さへも違する時節の斗られず「歎息されば人々も共に無念の色見して

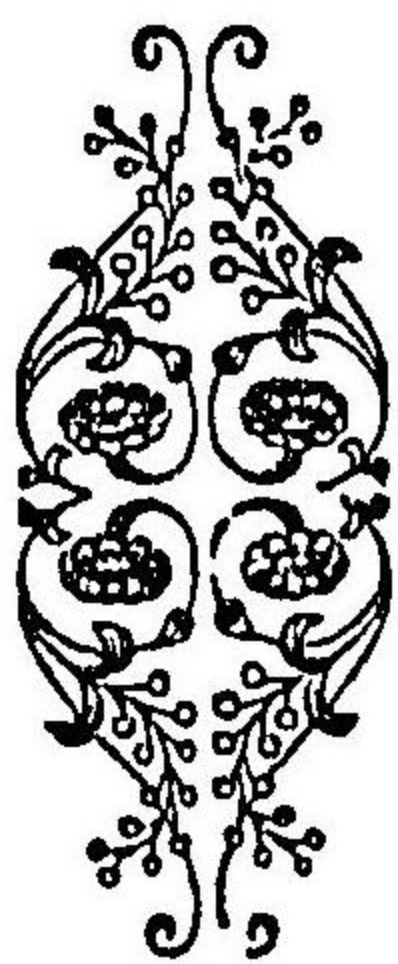
(辨)我々共も共にに艱難なして御供なすも當時天下に頼むべき仁者は奥の秀衡殿是へ便りて身を落付鎌倉殿の御怒りを申なだめて貰はんと遙く下る奥州路(海)是みな逆檢の論かして遺恨を含みし梶原景時心ねぢけし去れ者ゆへ君におもねり諂ひて御叛謀有と讒言せしゆへ(龜)御連枝なれと御腹が違へば左ある事もあらんかと賴朝公の御疑念深く(義)抑々都を落しより枕を高く寐し事なく(辨)我君初め北の方臣下の者が斯迄に(海)旅路に艱難辛苦なすも是皆倭人梶原ゆへ(伊)秀衡殿の扱ひにて和睦にならぬ其時は(龜)必定梶原親子の内討手に來るに疑ひなし(駿)望む所の敵なれば彼れを討取鬣首にかけ(權)日頃の恨みを(皆)晴らしくれん「各々一騎當千に勇み進みし有様は鬼神も恐るゝ如くなり老母ははくくうなづきて(教)左ある事も有らんかと兼く君の御味方をかたらひ置し心盡し出羽十二郡に佐藤の類是に奥州五十四郡の名ある者と心を合せ御加勢なさん其爲にあらなる奥の一ト間の内へ飾り立たる旗なるし淺香麻生は奥の間の旗を開て御覽に入れよ(兩人)畏り舛た「差圖にはつと兩人が奥の旗を押開けば飾り立たる家々の旗の印の紋盡し(義)ホ、ヲ見渡す向ふに掛たるは味方と頼む人々の其家々の旗印(辨)思ひくくの染色に(海)何れも違ふ紋盡し(駿)是こそ奥羽兩國に(龜)名を知られたる勇者成らん(伊)其人々は誰成るぞ(權)逆もの事に姓名を(三)是にて語り(皆)聞されよ(教)御披露の爲荒増を語り申さん聞給へ○「イヤ語らんと座に直り(夫出羽の國十二郡は和銅年中の頃とか

よ○「陸奥の國をわけ給ひ羽黒の山の鷹の羽を敷並べたる威徳とて羽を出す國と書記す國のならひに義を磨き心一致に武をはげみ(あ)の中央に飾りたる一際目立白旗は信濃源氏の末葉たる河邊の武部國時が年八十の白髪に○「雪を頂くもら雀竹に羽をのす定紋と申さずとても兄弟が家の印と御覽せよ(次に掛たる四ツ目の紋は最上山形平賀の七郎「三ツ菱四ツ菱五本骨」御運も開らく扇の紋は佐竹田川の一流にて(姓と源氏に候とて源氏車の紋所は伯父の小太郎季平が「家の印に候なり(扱其次に幾流れ大旗小旗花やかに掛ならべたる人々)は○「出羽奥州に名を得たる宮城堀川安達的面く(南部内藤小泉三郎宮津舟岡柴田五郎「津輕會津外ヶ濱長田長岡鳥の海信夫兄弟松前四郎(いづれも一騎當千ゆへ此者共は一手にあり○)で「暇に及びなば君の御勝利疑ひな」今見る如く教信が幸先祝ふ物語り實に頼母しき老女なり(義)ホ、ヨ添き老尼が忠節我に於ても満足あるぞ(教)ハツ(辨)忠臣繼信忠信の二人の母とて感心致す(海)奥州下向の我君を(龜)御待請に一類の(駿)諸士をかたらひ置たるは(伊)男子も及ばぬ大器量(三)斯る御味方ある上は(太)是より先は奥州路(片)秀衡殿の領地也(喜)旅中に心置に及ばず(小)高館城へ御入も(權)最早口つか一兩日(鶴)お心置なく御ゆるりと(龜)御逗留を遊ばませ(教)何は鬼もあれ我君へ九献を捧げ奉らん○「傍へに飾る茶棚か土器瓶子千肴を三寶に乗せ三人が禮義正敷差出し(イ)ヤ土器をお取り遊ばせ(義)老尼がもてなす添なす」人の情を汲みて知る土器を手に取り給へば(教)そ

れお酌致しや(鶴)畏り舛たト竹笛入り竹本二挺の合方にて義經土器を出す鶴若瓶子を取り酌をする義經一口呑み思入有て(義)ろも堀川を立てる落人の身に日夜とも物憂き旅中の艱難に安き心のあらざれば遂に是迄土器を取り上し事なかりしが(辨)今日老尼のもてあしに(海)久方ぶりの此酒宴(駿)千代もかわらぬ土器に(龜)万代祝ふよる昆布(伊)敵に勝栗巻(郷)誠に出度事こそ(權)一同恐悦(皆く)申上舛る(義)此土器は二代の家臣へ(教)ハ、有難ふ(四人)存舛る「黄金花咲陸奥に今に其名を残りけるト皆々引張宜敷段切にて

拍子幕

千歳曾我源氏礎 大尾



19
503

明治廿七年九月十一日印刷
明治廿七年九月十四日發行
版權與行權所有

定價金七錢

著作
者
故
吉
村
新
七

本所區南二葉町卅一番地

發行者
吉
村
上
と

同

印刷者
堀
内
誠
次
郎

芝區南佐久間町貳丁目拾番地

印刷所
堀
内
活
版
所

同

19
41
508

演劇脚本

其階魁契
儘子若戀
姿出木春
寫初對粟
繪業面餅

版權所有
興行

全壹册



淨瑠璃

其儘姿寫繪

清元連中

竹本連中

一 幽靈 一人

一 立廻り 二人



懸扉ノ神雲

相長家七助

同 六兵衛

寫繪の口上者 福助

三番叟

千歳

蝶遣ひ 胡蝶

獅子遣ひ 牡丹

寫繪の口上者

一 犬 一疋

本舞臺一面の淺黄幕通り神樂にて幕明くと矢張り通り神樂にて下手より隠居白髪鬘羽織着流し杖を突き出て來り跡より六兵衛七助羽織着流しにて出て來り(六兵衛)モシ〜其處へ御出被成升は横町の隠居さんではムり升ぬか(隠居)ヲ、是は七兵衛さんや七助さんお揃ひ



で何處へお出被成るな(七助)此先の別荘で故人龜屋都樂から預つて居る寫し繪が抜け出升といふ(六)そつと透見を仕升ふと二人り連で出掛て來ました(隱)夫れは能い所でお目に掛つたわしも其寫し繪の抜出るのを見に行升のさ(兩人)左様なら御一所に參り升ふ(隱)巨勢の金岡左り甚五郎名人上手の仕置たものは皆魂がは入りて居る柄其形が抜け出升て(六)夕ア見た者の嘶でムリ升が實に生て居る様でさま(口をき)(七)立廻り柄所作事迄芝居で役者のする通り寫し繪の様ではムリませぬそうだ(隱)そりやア其筈の事だ貴様達は知るまいが故人都樂と云ふ者は初代可樂の門人で元は嘶家で有たが寫し繪と云ふものを工夫して都樂が元祖で初めたのだ其都樂が魂を入れて書て置た書だと云ふ柄抜け出て働らく筈だ○イヤ先其頃は嘶の元祖立川のぢいさんが達者で寄せで嘶しを初めたのが石井宗叔佐川東幸夫柄續いて可樂むらく鳴物入りが圓生に怪談が正藏音曲嘶が十番の扇喬影芝居がそば源に坂東政吉皆古人になつて仕舞つたが今達者のが八人藝の壽鶴齋計りだ(六)又隱居さんの昔嘶しが始まつた是柄出るのが釋迦縁に雷電(七)助廣始から市紅白猿六部順禮の嘶しも度(聞升た(隱)兎角昔が懐かしく今中見世の古本屋で古イ番附が有た柄買て來たト懐ろ柄番附と見へる觸書を出す(七)そりや何時頃の番附だか一寸お見せ被成い升(隱)貴様達が見ても分らないおれが讀んで聞せよ(六)どうぞお聞せ被成て下さりませト隱居觸書を開き(隱)淨瑠璃名題——淨瑠璃太夫——○ト太夫連名役人を讀之(ヤこりや淨瑠璃の觸書と聞

違へて持て來た(七)早くいつて取替てお出被成い(隱)何んといつても年のせいで目が悪るくつていかないト時の鐘鳴る(七)ヤモウあの鐘は暮六ツだちつとも早く寫し繪の抜け出るのを行て見升ふ(隱)チ、そうだ(長嘶しは跡の邪魔だ又あつちへ行てゆつくりと嘶し升ふ(六)左様ならば(兩人)隱居さん(隱)ドレ一所に行升ふかと又通り神樂に成隱居先に六兵衛附添ひ上手へは入る知らせに付淺黄幕切て落す

本舞臺都て寫し繪高座の摸様人寄せの鳴物にて道具納るト鳴物打上下手霞幕を切て落し爰に清元連中居並び直に淨瑠璃に成る「金岡が筆はものは寫し繪の生るが如き働きは龜屋都樂が新工夫茲に寫して淨瑠璃の種に芝居も小春月歸り花咲花舞臺ト是にて正面の白木綿の幕を引て取り跡黒幕になり上手霞幕を切て落す爰に竹本連中居並び居て「いつも替らぬ口上も名に大天窓上下の色さへまさる萬紅葉ト此内正面黒幕の内より口上言額の出たる詠らへのかつら子持筋紅染の上下扇を持居りし儘舞臺能所迄押出し(福助)高ふはムリ升れど御免を蒙り升て是より口上の申上奉り升先は御最負とムリ升て相替らず賑々敷御見物に御來駕なし下され升る段惣座中蛸計りが○イ蛸ではないいか計りかありが鯉仕合に○イヤありが鯉ではないありが鯛仕合にムリ升る○ト辭義をなし(實にありがたい仕合にムリ升る○ト辭義をなし(どつこい違つた有難い仕合にムリ升る○ト辭義をなし(扱爰元にて御覽に入れ升るは吉例の三番更引續きて四季の百花鳥並に諸國名所の引道具滑替怪談を取り

仕組御覽に入れ升る○又中入り後には二重風呂出遣にて所作の大怪談を御覽に入れ升るよふにムリ升るが先は三番叟初まり其爲口上左様○ト辭義をなし(最一ツまけて其爲口上左様○數よく三つ其爲口上左様「立んどせしが足しびれ京へ登りの座頭の坊片し無くせし下駄ならでちんば引く」と口上言宜敷振り有て(皆さんあばよ「入にけるト福助下手黒幕の内へ遣入る直に上下へ切出しの若松出る「常盤の色の若松に鶴のよはいの千歳が面箱撈へ静と脇座へ直れば三番叟ト此内寫し繪の鳴物を冠せ下手より千歳侍烏帽子面箱を持出て來り上手へ住ふばた」に成り下手より紐烏帽子素袍三番叟出て來り「あゝさへあゝさへ悦びありや」我思ふ所より外へはやらむとあんもふト三番叟ふり有て「桐の押への盃ももめてもみだす鳥飛とつばひとへにまいらす酒は劔びし劔烏帽子「素袍の摸様鶴首の銚子も長い跡引に「誰にあふぎの末廣やさす手引手の振事に「ふるや徳利の鈴の段「管の種蒔三番叟ト此内寫し繪三番叟振り宜敷有て「拍子とり」打こみやト三番叟下手へは入る「續くしやぎりの太鼓持客を待夜の松盡しト千歳立上り引抜き奴盜太鼓持に成り扇を持ち「一本目には池の松二本目には庭の松三本目には下り松四本目には志賀の松五本目には五葉の松六つ昔は高砂の尾上の松に栖をくひし鶴も千歳の尉と姥腰も曲りてはしを杖額に寄るさゝなみも女波男波の打合せト此内千歳扇にて振宜敷有て「爰らが汐の引き時と浮かれ興じて入る跡へト千歳下手へは入る「又もひよつくり口上言ト又黒幕より福助着流し肩

衣計りて後ろより出て來り上手へすわり(福助)東西○ト是にて鳴物打上ケ(扱私が出ないと口上はく)と美しいお嬢様方がお待兼故お邪魔乍又出升てムリ升る○只今は吉例の三番叟首尾能く相勤め升てムリ升る是よりは四季の草木百花鳥を御覽に入れ升る先は目出度富貴草牡丹を顯はし御覽に入れ升る○トせんまいの鳴物に成り正面へ詠へ牡丹苔の石臺へ押出す(扱お目通りへ顯し升たる石臺の牡丹苔みは残らず開き升る○ト又鳴物に成り牡丹の苔み仕掛にて花一時に開く福助之を見て「イヤこいつ妙だ○トひつくり返る(まづ牡丹の花が開き升れば露吸ふ蝶の戯れより獅子の狂ひを御覽に入れ升る○ト辭義をなし(是であれが役は濟んだが樂屋へ行て茶でも呑ふか一寸表へ行て一杯やつて來様か樂屋へ行ふか表へ行ふかハテどうした物で有ふな○「潮來出島の十二の橋どちを渡るか思案橋(ちよいと來なせ○ト合方鳴物にて宜敷振り有て寫し繪の見得にて上手の大わくへ天窓を打付(アイタト、ト下手より蝶遣イ振袖形り扇の番ひ蝶を持出て來り「おのが羽風にひらくと白くれないの花に置露に戯れ狂ふにぞいと詠めの深見草ト蝶遣ひ振り有て獅子舞兩人對の振袖形り詠への獅子頭を持ち出て來り「今を盛りと咲花に對の出立の鏡獅子立舞ふ蝶に餘念なく共に狂ふて舞遊ぶ「姿色ある袖の雪解て寐た夜のみつ言につらき別れの朝日山心つくしに思ひわび爰に三國や汐風の便り滞にます花の外にあり共志ら菊の女子はぐちのいつも白ユ、

なんと狸と亂れ紅八重九重の思ひかなト此内二人の獅子舞くとき模様蝶遣イをわしらひ宜しくふり有て「時しも風に舞ふ胡蝶女獅子男獅子の追ひめぐり狂ひ亂るゝ有様はわたへひらりこなたへひらりひらりひらりくくくおのがさまく牡丹花の色香に引れ戯れて狂ひ狂ふぞ目ざましヤト此内獅子舞兩人獅子頭を持蝶遣イ蝶の思入にて兩人追廻す此内二人黒四天たすき鉢巻十手にて打て掛り寫し繪の立廻り宜敷有て「實に勇ましき若獅子と名に橘のト三重にて皆くを黒幕にて消し清元連中も霞幕にて消し上手霞幕を切て落す竹本連中居並び居てせりふに成る(福助)扱是よりは前藝と仕り千人塚骸骨の怪談を取立御覽に入升る「吹おろす木の葉落しの小夜嵐身に染く」と物凄き茂る柳の無縁塚青き灯影は人魂がぞつと時雨の雨上り千日参りが一人り言ト此時上手へ右の千人塚柳の立木を出し木魚入りの合方に成り下手より坊主鼠頭巾鼠の着附胸へ鉦を掛クまきみの入りし手桶を提げ鉦を叩きて出て來り(坊主)扱く今夜は開い晚だ鼻を摘まれるも知れない今びかりと光ツたのは慥に人魂に違ひない聞ば此頃千人塚へ幽霊が出ると言ふ事だどうぞ出合度ない物だが○「憶病風にぶるく」と怖氣だつたる後ろよりト詠への犬出て裾を喰へる坊主恟くりなし(アア、それ出たなんまいだく)ト犬わんくどほへる(ヲ、幽霊かと思つたら犬かヤレ恟りした斯う見へても生れ付病犬と幽霊が大嫌ひだ○ト跡を振り返り見て(ア、怖いく)と思ふせへか跡柄人が來る様だ南無幽霊とんせう菩提南無阿彌陀佛く○「どきつく

胸にひやく鐘一吹さつと生々さき風に扱はど打驚きトどろくに成り坊主ぞつとせし思入にて(そりやこそなまぐさい風が吹て來た「ぞつと身の毛も忽に陰火えんく」と燃へ上り顯はれ出し幽霊がいとうらがれしこはぬにてトどろくに成り上手に大きな陰火のきぬたをよろし宜敷此影より幽霊額に三角の紙を當て男の亡者にて出て(幽霊)恨めしひト坊主恟りなし(坊)南無幽霊頓生菩提南無阿彌陀佛くト鐘を叩く思入(幽)恨めしい(坊)ア、は何も恨めしいと言れる覺へは無い南無阿彌陀佛く(幽)恨めしい(坊)去りとはまつこい早く消て吳ぬか南無阿彌陀佛く(幽)恨めしい(坊)是程念佛を申に聞へぬのか(幽)恨めしい(坊)エ、何んで幽霊には聞へぬぞ(幽)ヲ、何といふかさつぱり聞へぬおれはかな鬻うの幽霊だわ(坊)何鬻うの幽霊だ道理こそ聞へぬ筈だ○ト始終坊主は震へ聲少し怖くなくなりし思入(コレ幽霊こなたは何で死んだのだ(幽)ヲ、おれは玄んの勞れで死んだのだ(坊)何んだ玄んが勞れたハ、アイヤ羨ましい病で死んだなシテこなたの女房は何もものだ(幽)ヲ、おれが女房はお屋敷の御殿下りのぼつとり者ト下手霞幕切て落し清元を出し「本に男と云ふ者はおれより外に白齒から今年はたちで眉落し十三七のおすき様「それゆへ終に愚で蠅イ「推量こゝとコボンくせき入るにぞト幽霊宜敷ふり有て(坊)イヤ呆れ返つた幽霊だ坊主を取らへてのろけるのか勘定しろといつた所が六道錢より持ては居まいが何にまろ夫程迄に亭主を大切にすると云ふは好もしい女房だが其女房はどうしたぞ(幽)サ其後わしの事

を思ひ是もとう／＼こがれ死に死んで仕舞つた所柄一ツ邊に暮して居たがツイ此間少しの事柄夫婦喧嘩をやつたので宙宇に迷つて娑婆へ行のだア、恨めしい(坊)何が恨めしひ事があるものか女房にそんなまゐられるとはさりとて／＼浦山しい(幽)イヤ／＼恨めしい(坊)イヤ、ヤ浦山しい(幽)ヲ、夫程迄に浦山しくばこなたに女房を譲ふからおれに替つて死んで下され(坊)其女房は好もしひが死ぬのは否だ眞平／＼(幽)そ言はずと死んで下され(坊)エ、思はしひ爰を放さぬかい(幽)イヤ、放さぬこなたを冥土へ連れて行ぞ「冥途へ來れと取付にぞ仕方南無阿彌寒念佛有合卒塔婆でめつた打不思議や有りし幽霊の背顔忽ち消失せて只白骨のみぞ残りりト此内坊主卒塔婆を持って打て一寸立廻りどろ／＼にて幽霊引ぬき骸骨と成る(坊)ヤアこりや幽霊は骨になつたか(幽)サアおれと一番角力を取れ(坊)何角力を取れどは(幽)ヲ、おれが負たらゆるしてやる勝たら冥土へ連れて行ぞ(坊)なんでもおのれに負様ぞ(幽)そんなら爰で(兩人)一ト勝負「打出す修羅の太鼓につれまど踏みならし西方の「西と東に立別れト修羅太鼓を角力太鼓の様に打込み兩人左右へ別れ角力の思入「西イヤれ頭うべ／＼東イヤ寒念佛／＼ト兩人立向ひ合ひ「あうんの息と諸どもに立合ふ骸骨寒念佛「四十八手も亡者だけ天蓋附のこし車「身はあだし野のはら櫓四ツに渡つて取組しは是ぞ蓮の花角力「負腹立つてそとばにて打て掛ればてふと受「一活さけんで打込む卒塔婆「受損じて骸骨は「南無阿彌陀佛の聲諸共「骸は碎けてばら／＼／＼ト此内角力太鼓にて兩人角力

の振り宜敷有て坊主負卒塔婆にて打て掛る幽霊も卒塔婆にて是を受け白嚙子に成り立廻り宜敷あつてトト幽霊ばら／＼に碎ける「こいつをみやげに骨酒と「有合ふ細にて結ひからけ手桶と一荷に打かつぎ我家をさしてト坊主骨を縊り細にてからげ行掛る大どろ／＼に成り後は黒幕一面の陰火うつる坊主うつぶせに成るどろ／＼打上げ陰火消る(坊)ハテ恐ろしい執念じやなアト宜敷思入是へ霞に日の出を引出す鶏笛にて

階子乗出初晴業

鍛冶橋内出初の場

一	齋の者辰五郎	一	齋の者竹次	一	巾着切豆蟹小助
一	同 興吉	一	同 彦兵衛	一	待合女房おやま
一	同 梅右衛門	一	町人 金兵衛	一	げいしや小 榮
一	同 八百吉	一	同 銀藏	一	書生田口伴作
一	同 音松	一	百姓 權右衛門		清元連中
一	同 勘太	一	同 作十		
一	同 丑松	一	同 菊松		

本舞臺都て鍛冶橋内土手際の昧爰に百姓權右衛門作十木綿やつし股引尻はしをり草履赤い
 クットを肩へ掛居る町人金兵衛銀藏羽織着流し駒下駄にて立掛り居る此見得通り神樂ラッ
 ハの音にて幕明く(權右衛門)モンわしらア田舎者でござんす柄何所が何所だか分らぬへけふ
 仕事師の出初の有る(作十)警視廳といふは何所がござんすかどうぞ教へて下せへまし(金兵
 衛)そりやアツイ此先だがすばらしい見物だから容易な事じやア見られぬへ(銀藏)今迄わ
 たしらも見て居たが半を撰様に押される柄引いて来る歸りを見様と此土手へ逃て來たのだ

(權)國への土産に見て行てへが勝手の知れぬへ所だ柄怪我でも仕ちやアつまらぬへ(作)お
 二人りさんの云ふ通り押れて見るより引て来るのを爰に待て見升べい(金)それが何寄上分
 別巡查方が引切りなしに廻つて居るのに目を忍び巾着切が居り升から(銀)懷中物や煙草入
 うつかりすると背負て居るクット迄取られ升せ(權)そりやア油斷のならぬへ事だ作十用心
 仕たがよい(作)わしやア輝へ礼も錢もしつかりくるんで置升たトいひ乍兩人をきよろへ
 見る(金)何をきよろへ見なさるのだ私しら二人りは堅氣の商人(銀)巾着切じやありませ
 んから氣を附るにやア及ばない(權)イヤ人を見たらどろぼうと思へど能く親仁が言ひ升た
 柄(作)失禮乍お二人りにもわしらア油斷を仕ましぬへ(金)田舎の人は正直だが何所柄東京
 へ來なすつたか(銀)何でも詞の様子じやア上州邊の人達だね(權)きのふ兩國で見て貰つた
 占いよりよく當りました(作)わしらア上州沼田の下新田の者でござんす(金)夫じやア鹽原多
 助の國だね(權)ハイ同村の者でござんすが今度木挽町の歌舞伎座で菊五郎がするといふ柄ら
 (作)態へ夫を見に來升た(銀)そう云ふ事じやア馬喰丁に宿を取て居被成るのだね(權)ハ
 イ荊豆屋に居り升が今朝半鐘が鳴たので火事だと思つて恟りしたら火消の學びがあるのだ
 と聞きましたから見に來升た(作)是柄芝の愛宕様へいつて神明様から増正寺の大鐘を見に行
 升ので宿で道を書てくれたが一寸是を讀で下せへト懷から書附を出す(金)どつこい夫は淨
 瑠璃觸れ讀まずと知れた役者は惣出太夫は清元榮壽太夫に菊壽太夫(銀)三味線は梅吉に上

調子は(權)こりやア趣向がだめになつた(金)斯んな物を讀手間で早く土手へ上つて見やう(作)わしらも一所に行升べい(銀)しかし只も引込まない(金)いよ／＼此所淨瑠璃初り○サア行やせうト右の鳴物にて四人橋掛りへ這入る知らせに付策矢來を打返し爰に清元連中居並び直に淨瑠璃に成る「新らしき年を迎へて冬乍爪のうなりに春めきて空に霞も辰の年辰の一日忽ちにけふは四日の出初式ト合方通り神樂にて向ふより小榮黒の羽織藝者他所行の拵へお山船宿の女房の拵へにて出て來り跡より田口黒の帽子洋服背胸へ金鎖りの時計を掛少し酒に酔ひしこなしにて小榮に見取れ居る「組合衆の勇ましき氣やりの聲に起されて亂れし髪の柳橋惠方參りをかこ付に氣も合乘りの車柄下りて連立八代洲橋渡りに船と生醉がくだもはれ者の女房が中を取拵あやなして土手のこなたへ來りけるト小榮出掛りお山兩人にて振有て能所より田口這入り三人宜敷有て臺舞へ來り(田)コレ小榮なぜ知らぬへ顔をするのだ(小榮)あなたはどうなつてムリ升か私しは存じません物(田)何存せん事が有ものか先頃僕が校友と築地の隅屋で懇親會を開いた時に君が酌でへ／＼れけに成た事が有る(小)ムヒ升たか知りませんが大勢様のお座鋪ではお見忘れ申升(田)そつちは忘れるか知らないが僕は中／＼忘れない計らず爰で出合ふたは月下氷人の引合せ何所かそこらの待合で一杯やる柄來て來りやれ(小)けふはお約束がムイ升柄御一所には參られませんか(田)なぜ參られぬと申のだ(小榮)あなたも粹士の様にも無いけふは晩迄お約束のお客様がムリまして今參り升

所故御一所には參られませぬ(田)いやだと言は腕力で連て行柄さう思へ(小)なぜそんな野暮を仰しやり升「酒の機嫌のこぶ柳よれつをもつれつ言ひ寄るを風のまに／＼執成せど聞ぬ田舎の片意地に持て餘したる後より見兼て飛込む蔭頭トお山田口を取らへ執成思入の振田口小榮を連て行ふといふ振り兩人困る此時後へ與吉紺の腹掛股引長半天三尺役半天を着て草鞋がけにて出て來り此中へ這入り田口を突倒す田口どうと成り(田)アイタ、、、(小)ヤお前は與吉さん(山)能所へ來ておくれだねト田口起上り(田)女にしては強ひやつと思つて居たが今僕を突倒したは手めへだな(與吉)何處の馬の骨か知らぬへが弱へ家業の藝者を取らへ無理な事言柄突倒したがどうしたのだ(田)イヤどうのかうのと失敬極まるどぶ浚ひ馬の骨とは何の事だ國では縣會の議員の一人既に國會開設の際代議士にも成る所僅かの點の違ひにて朋友に勝を取られ遺憾隨に通つたが此次の國會には必ず代議士に出る僕だ平民ならぬは鼻の下の髭を見て物をい(與)猫でぬへ證據に傍へ竹を書と柳原の古洋服に鯨髭をひねつくつて分の分らぬ漢語を遣ひ官員めかす喰せものうぬらに虎の威をふるはれ猫になつちやア居られぬへぐず／＼いやア横ずつぼうを叩きなぐるが當りめへだが今文明の世の中に驚の者でも夜學に行きやアそんな野蠻な事は仕ぬへ巡查方へ引渡し有無を言せず拘引させるぞ(田)ヲ、拘引するなら拘引しる警察所へ出て辨明致す(與)まやらくせへ事を言やアががるな(田)サア僕よりうぬを拘引するぞト田口立掛る爰へ豆蟹小助紺の腹掛股引

屍はしより半天掛草履にて出て來り田口を留め(小助)モシ／＼旦那どういふ事の間違かけふ出初の人足衆と喧嘩を仕ちやア割が悪い若イ手合に聞れたら袋叩きに成り升柄杓ア御了簡被成ませ(田)イヤ／＼了簡成らぬ／＼(小助)そんな事を仰しやらすと(田)入らぬ留だてすつこんで居れト振り拂ふ此内金時計を摺り取りいつさんに向ふ(田)是にて田口胸を見て恟りなし旦那今留たのは名代の摺り何んぞ取られは被成いませぬかト是にて田口胸を見て恟りなし(田)南無三金時計を取られたどろぼう／＼ト花道へ駈出しばつたり轉び「石に爪突きばつたりと轉んで膝を摺こわしちんば引／＼欠り行ト田口起上り膝を痛めしこなし有てちんば引て向ふ(遣入る)與 馬鹿野郎めいゝ氣味だ(小)いゝ氣味だといふ物の時計を取られたのは氣の毒な事だね(山)なアに本金じやアないあるみだよ(與)ム、あるみの時計を持玉だ○そりややさうとおめ(遣はけふの出初を見に來たのか(小)イ、エ出初じやヤ有りません私しやお前に逢に來たのさ(與)何おれに逢に來たとは(山)さつぱり近所へお出でない柄小榮さんも氣を揉で(小)大方向所へか遣入り所がト此時後ろへ音松與吉と同じ拵へにて出て來り(音松)兄貴は此比本所へ色が出來て朝ッ拵あつちへ計り行て居る柄思入いじめてやんなせ(小)チャ音さん本どうか(音)そりやアおれが保證人だ(與)詰らぬ(事)を焚付るな店の地面に仕事有て夫で本所へ毎日行のだ(小)イエ／＼そうじやムんせぬト是より口説きに成る「去年の暮の寄合柄志かもお前が當番をかついで中へ繰り込んでばんぶの雨に三日

程「流しなんすも階子より登り詰たる中とやら互ひにあつく形り振りも「搦はぬ末の消口を私しが向ふへ取られては「腹が立つではないかいなト小榮與吉出掛り能程にお山音松からみ宜敷説口き摸様の振り有て(與)ヤもう向ふ柄引て來たぜ「東の花と昔より稱へし四十八組の振り出す纏長階子日影輝く長鍵や磨く男の勢揃ひけふを出初に半鐘の音に響きし頭分目立朱入りの半天に列を正して來りけるト此内向ふより傳次同じ拵へにて長階子をかつき出て來り跡より辰五郎同じ拵へにて詠への纏を振つて出て來り續いて梅右衛門八百吉彦兵衛勘太竹治鷲頭小頭の拵へ菊松丑松同じ拵へ相中惣出の鷲の者同じ拵へ長鍵をかつぎ氣やりを呼乍出て來り皆／＼舞臺へ纏を立居並び辰五郎纏を外の者へ渡し(辰五郎)ヨッ與吉手めへの影が見へぬへ柄本所へ行たと思つたら又小榮ほうといちや付か(梅右衛門)出初早／＼でれすけはあんまりひどい仕方だぜ(八百吉)こいつア只是通せぬへ胴上にもまてやらふ(音松)突放して腰でも抜しやア小榮さんが泣出す柄(彦兵衛)晩にみんなで押込んでまつかり何ぞ奢せやう(與)酒は上柄下すつた樽が有る柄たらふく呑ぬへ(梅)さうして着はどうする氣だ(與)言ずと知れた着は鯛だ(辰)何ぼ高尙流行でも鷲の者が酒を呑に干着計りは高尙するぎぜ(小)出過た様だが皆さんへ私しが何ぞ奢りませう(八)兄イじやアけんのだが(勘太)今賣出しの氣めへ者(竹治)小榮さんなら大丈夫だ(與)そんなにおれを安くするな食傷する程奢ッてやらう(丑松)兄イおいらにも何ぞ奢てくんぬ(與)きのふ爪を買て遣つ

淨瑠璃

魁若木對面 富本 連中

契戀春粟餅 常磐津連中

- 一 工藤左衛門祐經 一 粟餅屋白平
- 一 近江小藤太 一 同 杵作
- 一 八幡 三郎 一 白魚賣三筋の綱吉
- 一 曾我十郎祐成 一 鯉賣深川の三吉
- 一 同 五郎時致 一 女太夫お梅
- 一 和田の舞 鶴 一 地廻り 六人

本舞臺都て鎌倉長谷の觀音三十三間堂の鉢盃拍子にて幕明くと頭取出て淨瑠璃名題同太夫連名役人名前を讀其爲口上左様と知らせに付上手廻廊の張物打返し爰に富本連中居並び直に淨瑠璃に成る「薪こる鎌倉山の初霞ひくや鼠負を掛的に魁きそふ小殿原矢並捕へてむつまじく當りを願ふ弓初と跳へせり上の鳴物に成り舞臺真中に祐經羽織衣裳大小祐經の拵先に小サなの附しを持立身上手に近江柿の上下大小吉例弓を持ち下手に入幡同じく扣へ居る是より下へ舞鶴侍鳥帽子かちんの掛素袍金の采配を持花道へ祐成長上下小サ刀吉例時致

同じく拵へ三寶に矢を乗せ是を持立掛居るを祐成留て居る此見得双方一時にせり上ク「身にも應せぬ大役に何れも様のお叱りをかへり三ッ羽の矢數より三千餘町のお取立時に近江ぞ有難き八幡矢聲に舞鶴が弓も引方取りもちし蝶と千鳥の兄弟は家のかぶら矢親譲り磨く矢の根の若いどし(祐經)賊や一張の弓の勢ひに四異八荒の果迄も随ひなびく時津風(近江)太平颯ふ鎌倉の治に居て亂を忘れざる矢數争ふ弓初め八幡若殿原の大寄にあたりはづさぬ大的を討拔し跡や星月夜(舞鶴)殿御の中へ恥かしき鳥帽子素袍も兄さんの替りにたつか弓取りの(祐成)目さす相手は名にしおふ三ヶの所領三間堂けふの射初を待兼て(時致)心は矢たけにはやれ共鈍き拳しの我くは射術の道も白羽の矢(祐經)そも弓箭の名所を尋ねていはい數多く(近)先ッ裏はづに日天子元はづに月天子(八)握りは七曜七重に巻重藤の數は二十八宿(舞)盤目に用ゆる二筋の水羽兵羽のかぶら矢は(祐成)是は陰陽にかたどりて山鳥の尾に不淨を拂ひ(時)弦音高く射て放す矢靜に悪魔を降伏なす(祐經)左れば唐土堯の代に十の日輪出し時(近)翠が矢先に九ツの日をば忽射落したり(八)我日の本にもその古しへ近衛の院の御時に(舞)順政勅を蒙りて鶴をば射たる武の譽れ(祐成)其弓矢ゆへ赤澤の露と消にし父の仇(時)ねらひ定めて只一ト矢にト立掛るを祐成留て(祐成)アコレうかつに切て放しなばぬらひもそれて恥の恥時節を待ッて重藤の(祐經)引や弓矢の古事來歴(舞)先ッ魁し梅の春(祐成)これや若木の(時)對面と(祐經)★、(六人)うやまつて申「梅の花方箋のつら

ぬは江戸の春なれや(近)行氏も見やれわれに控へし兩人は見る樹形りもそがくど貧乏じ
 みたやつではぬ(か)八)誰が手引か我君の御前間近く不禮なやつ(兩人)イヤ我くが(祐
 經)兩人控へい(兩人)ハッ(祐經)祐經思ふにアノ二人りは何か願ひの有る者成らん何と舞
 鶴そうでは無いか(舞)あれ成る二人りは舞鶴が手引なしたる矢數の役人けふ褒美に祐經様
 お逢被成て下さんせうなら兄朝日奈が名代にかつちけないでムんすわいな(祐經)コハ改り
 し其の願ひ余人成らば兎も角も茂盛殿の秘藏娘殊には兄たる朝日奈が名代とある事なれば
 (舞)逢ふて上て下さんすか(祐經)如何にもそなたの詞に任せ(舞)エ、嬉しふムんす(近)イ
 ザ我君には(八)まうけの席へ(祐經)高座御免下さり升ふ「流石鎌倉一箇と言はぬと藁る裏
 梅のゆるしを受けて舞鶴が顔にあかねの初日影ト此内祐經吉例の貳疊臺へ乗る舞鶴は前へ出
 て花道へ向ひ思入有て(舞)夫に控へしち二人りさん今の詞を聞しやんしたか願ひに願ふた
 祐經さんが逢ふてやらふときやアる程におめづ臆せず恥らはず急いでのたくり出やしやん
 せいなア(時)参り升べい(祐成)コレ必ず鹿相の無い様に(時)合點だ〇「荒氣な風も青
 柳の枝にしづめてしづくとしづけき色の若緑り(親の敵祐經觀念(祐成)コリヤせく所で
 無い早まるな(祐經)我を目掛けて敵といふ是成る二人の面ざしを見れば見る程ア、似たは
 く(兩人)似升たな(舞)似たとは誰に(祐經)河津の三郎祐康に生寫し成る二人の面ざし正
 敷河津の悴にて忘れがたみの兄弟ならん(舞)斯も目立升る上柄は何をか包まんち二人りは

祐康様の忘れがたみ(近)兄の一滿生長なし祐信殿の養子と成り曾我の十郎祐成(八)弟箱王
 人となり北條殿のえぼし子にて曾我の五郎時致(祐經)扱こそ二人りは兄弟成りしか(近)見
 れば年端も行ぬ身で當時一箇別當たる(八)我君左衛門祐經様へ刃向ひ立は及ばぬ事だ(近)
 斯いう近江の小藤太成家(八)八幡の三郎行氏がお傍になくばいざ知らず(近)どつこい(八)
 そつこい(兩人)やりやアしよぬへはト兩人屹度成るを(祐)近江八幡扣へい〇二人りの者が
 祐康に別れし折は五ツか三ツ(祐成)十八年の其間父が最期の其無念(時)忘れもやらぬ此年
 月(祐)親を討れて無念なるか(時)さん候(祐經)口惜しひか(時)さん候(祐經)さもそうぞさ
 も有なん併し河津を討たるは斯いふ左衛門祐經ならず股野の五郎景久なるは(兩人)何んど
 (祐經)思ひぞいつる其時は「安元二年神無月十日あまりの事なりしか伊豆と相摸の若殿原
 赤澤山のはれ角力(近)股野は聞ゆる力強廣言吐きしを祐康が(八)股野を投し河津掛勝ほこ
 つたる歸り道(舞)ヲ、聞及ぶ其時に「河津殿の出立は秋野のすつたる狩衣にせんだんだう
 の月拂へ(祐成)竹笠さつとこがらしに「裏をかへして吹きそらし名におふ名馬の聞へある
 (時)村月毛に股がりて「絶所悪所の嫌ひなくしんずくと歩ませたり(祐經)スハ祐康よご
 さんなれど「柏が峠の南尾崎椎の木三本小立に取り一のまぶし二のまぶし切て放せば誤た
 らず「河津が乗つたる駿足の鞍の山形討けずつて「むかはぎの着際より前へすつばと射通し
 たり「萬夫不當の父上も大事の痛手にたまりへず「馬よりどうと落ちの露と消たる赤澤

山ト此内背ノ物語り様ノ振り有テ「今見る如き物語に時致たまらず立掛リト時致屹度成
 リ(時)扱こそ敵左衛門祐經(祐成)アコレ立騒イで尾籠な弟せいては殊に大事の前只何事も
 兄に任せて(時)アモ 祐成)じつと辛抱仕やいのト祐成留るを振拂ひ(時)いやだノ最う肝
 しゃくがこてへられぬト此時行ふとするを舞鶴是を留(舞)其處を一番朝比奈替り私しが
 留た時致さん「其かんしゃくも無理成らぬ五つやミさこの頃よりもうき鶯の月日立積る恨
 みの山雀や氣もはやぶさに鶯掛り思ふ敵の片うづら打て我名を雲非迄揚ひばりとは知り乍
 ら其荒鷹のあら氣をば縁のはし鷹舞鶴に一羽あづけて水鶏なら有がたなすびじや無いかい
 なト此内舞鶴時致を留祐成三人にて宜敷振有テ(祐經)流石は舞鶴能留た河津を討しは股野
 の景久此祐經は覺へない(時)覺へ無いとは卑怯な祐經(祐成)なぜ名乗つては討れぬぞ(近
 ヤア縱令主人が敵にせよ富士の御狩の物奉行(入)役目蒙る上柄は討事成らぬ祐經様(祐成)
 スリヤ早月下旬の狩くらまで(時)討事成らぬかいめへましいト時致口惜き思入(舞)とはい
 へ此場を此儘に只御二人りも歸られまい春の初の年玉替り祐經様のお盃を 祐經)何様一家
 の因みあれば二人りの者へ盃くれん〇近江八幡銚子土器もて(兩人)長ッてムり升る「仰せ
 にはつと兩人が替らぬ春の土器に銚子取り添差出せばト三保神樂に成り近江土器の乗りし
 三寶八幡長柄の銚子を持出て祐經の前へ置祐經土器を取り八幡酌をなし香で(祐經)兄なれ
 ば祐成へさし申そふ(祐成)頂戴致すでムり升るト祐成摺り寄り舞鶴取次酌をなし祐成香で

祐經へ戻す祐經又香で(祐經)五郎ヤイ(時)何だ(祐經)盃くれふつと參れ(時)頂き升べい
 ノ〇ト立上り屹度成て(けふは如何なる吉日にて日頃逢たい見たいと神や佛をせがんだ
 甲斐有て爰で逢ひしはうどんげの花待得たるけふの對面三ヶの庄の福は内鬼も十八年來の
 今吹かへす天津風盃頂戴致すでムらふト此内じりノと詰寄り土器を碎き三寶をめりノ
 とこわす(祐經)ハテ勇ましき時致へ絶て久敷一家の對面させうなれ共いノとどくれんト祐
 經懷より服紗包の狩場の切手を投て遣る祐成取上ケ開き見て(祐成)ヤ、こりや是れ狩場の
 (時)二枚の切手(兩人)何ゆゑそれを(祐經)廻り逢なば渡さんと兼ねて所持なす二枚の切手
 (舞)流石は左衛門祐經様(祐成)敵乍も情のたま物(舞)只何事も(近)早月下旬(入)先ッ夫れ
 迄は(祐經)祐成時致(時)工藤左衛門(祐成)祐經殿(祐經)ハテ珍らしひ(三人)對面じやなア
 「名におふ江戸の初芝居曾我中村の古事も相河原崎吉例に板東市川市村の榮へる春ぞ目出
 たけれト皆ノ引張りの見得宜敷カケリにて知らせに付大欄間打返し假宅格子先の張物に
 成り此人數を隠し上手淨るり蚤あほりにて粟餅屋の荷に替り下手廻廊打返し爰に常盤津連
 中居並び淨瑠璃に成る「淨瑠璃も曾我物語の二番目に辰巳の富士の裾摸様に狩場に有ぬ假
 宅の初すが、きに兄だいの女郎も並ぶ見世先を流て歩行く粟餅屋トすが、き通り神樂に成
 り上手より臼平杵作着流しおまよぼからげ粟餅屋の拵へ團扇を持出て「是は此度ホウヤレわ
 れはサノサすそんまかせて夜がな夜ト夜ひつたてとつたく放れぬ中の白と杵との拍子能

是ぞ評判本家本粟ト兩人宜敷振り有て、杵作)評判)本家本粟は是れでムい(白平)粟餅屋
 〳〵「名代〳〵と呼聲に呼ばれまねかれ親賣ト合方にて向ふより三吉奴天窓筒が半天草鞋
 覗の入りし、箆を天秤棒にてかつぎ出て花道へ留り「洲崎育の筒ばに唐人めけど假宅のまだ
 鐵炮の味知らず色氣中川三牧洲波の粟餅港抗のくひ氣に浮れ來りける(杵)ヲ、是は覗屋の
 奴さん今商ひからち歸りか(白)大方志つかり設かつたらう一ト盆おこる氣か無いかね(三
 吉)今永代團子を喰て來たが又粟餅は見のがせぬ(白)成程お前は色氣もあるが喰氣も又
 どうぞだね(三)あらア子供だ柄喰氣の方だ早く曲づきを見せてくんね(白)さらば曲春に
 掛うかト杵と白を出し「今年や世が世で木に餅がなるへッヤヤンヤレサテナヤレサテナ
 がか、しゆを譽るじやないがぞたい焼餅かんしやく餅で兎角物の胸にもちそうだぞ〳〵ア
 レハサコレハサ黄金餅ト白平杵作曲春の振有て納る「其粟餅の太神樂心浮きたつ鳥退や春
 めく聲の白魚賣ト通り神樂鳥退の合方に成り向ふよりお梅一文字の編笠下駄がけ三弦を持
 女太夫の拵へ綱吉紺の腹掛股引三尺帯尻はしよりのいなせの駒下駄白魚の箱を提ぐ出て來り
 花道へ留り「色じやなければど心では思ひ佃の四ツ手綱引手あまたの仇ものに及ばぬ鯉の瀧
 の屋と言はれて叩くさいじりや指先細き白魚のまだ一ちよぼにたらぬ年舟の浮氣にちやほ
 やと濡た水棹に檉棹のてうし合せて連れだちぬとト兩人花道にて振有て本舞臺へ來る(杵)
 誰かと思へば佃の兄いいらん達を迷はせに冷かしに來なすつたのか(綱吉)どうして〳〵

大違ひだ此春は辛抱人で朝柄晩まで商ひだ(三)又綱兄イが嘘ばつかりおめへにヤア假宅の
 女が皆んな迷つて居るぜ(綱)エ、手めへ迄が同じ様にそりヤア此粟餅屋の事だ(お梅)私し
 も斯んなに思つて居るになんのかんのと憎らしい(綱)そういふ譯じやアねへけれど此間も
 假宅で(梅)面白事かムんしたか(綱)聞てくんねへ見世先をそつとあるく頬冠り「私
 しや元より深川育貝の柱にかきの家根あだなあさりと添ふよりもやつぱりお前のばかいよ
 り「エ、いけどうめと言ふ聲を飛んで出モシおいらん柄お前にと言れて嬉敷見る
 り多にあばいが悪くてひこんでと字餘り字足らずちや〳〵無ちやくあの字仰向きこの字はこ
 いみよの字が横に寐て居るを上ツて寐ると考くつてタアも四百で明の鐘「けふは降るのに
 流してと氣轉黄袋房楊枝ちよつと櫻の立引に花咲く朝の迎ひ酒「本に私しが此様にあつく
 成るのにぬるひ佃主しの心に似たせへか土瓶の湯まで水くさくじれて茶碗のやつ當りわれ
 ても末に逢んとは嬉ひ中じやないかいな(白)エ、おれが見る前も憚らずとつ附たりひつ附
 たりかう見せ附られては男が立ぬ(綱)そういわれるとおれも又一番男を立にヤア成らぬへ
 (杵)一番目から二番目迄二人り寄ると女の争ひ爰は一番古めかしくも狐奉でおつ付なせへ
 な(三)狐奉なら此頃はやる初午の狸がいひせ(杵)そりヤア知らぬへがどんな奉だな(白)ヲ
 ット奉なら親譲り知らずばおれが教へてやらふ(綱)負腹を立ちヤアいかねへよ(白)そんな
 野暮な男じやアねへ(綱)夫じやア姉エ憚てくんな(梅)アイ〳〵合點じやわいな(杵)ドレお

れもやち馬には入らふか(白)サア〜早くやつたり〜ト白平杵作網吉前へ出ち梅三弦を
 弾く思入「初午にはやす太鼓のどんつくどん負ぬ狸が腹鼓ばんぼこどんつくばんぼこばん
 めんまり叩いてたん〜狸の腹が破れてぺこ〜〜是でも狐にや負やせぬト三人振り有
 て狐拳に成り(兩人)どつこい相こだ(網)早めてやつたりト又三人狐拳有て網吉勝白平負天
 窓を打れる(白)エ、いま〜しひおれが負たか(杵)所詮色じや叶はぬ〜柄やつぱりおめへ
 は踊りで勝ぬ〜(梅)ほんにお前の振事はあどつさんより能いとやら私しに見せて下さんせ
 いな(白) Chatt 皆迄のたゆふなお前の事なら何成りど(梅)そんなら見せて下さんすか(白)
 見せなくつてどうするものだ〇もし太夫さんお頼み申升「抑〜我等が仕にせには粟をか
 しぎて春初其正月は齒固めに彌生ハ雛の女夫事早月はちまきて蒲團着て寝たる姿や柏餅男
 は誰も一盛り「浮た波とや山谷の小船猪牙もこかれて通はんせさつさおせ〜妻越舟は七
 夕の其星合のちぎり餅あくるわびしき盆踊り「今宵逢ふどの嬉しさに積る泪の水増して中
 を隔つる天の川三ッぼの雨の戀知らずヨイ〜〜〜よいヤサそれ〜ヨイヤサト杵作宜
 敷有て盆踊より三吉出一人にて振り有て是より白平出「早菊の酒重陽のてうと引受酔され
 てエ、イ「酔たよた〜五人の中へ小町一人りを僧正遍照香や唄へや座も色見へてうつろ
 ふ文屋がほらふく柄にどうか心も在原さんに思ひだしたらまつ黒主了簡ならぬと腹を辰巳
 に世を宇治山の喜撰茶にしてちやんと來なせちやつとつむ茶摘の小唄ぶしト此内白平振有

てこれよりうちは太鼓を持「あつみサコレ五郎左殿サ庭の鳥はめんなごやのサツコイ〜
 かはい男の目をやさんますせう〜かんらくどもなんばんばたけでやつてくりよコレ枯木
 に花が二度咲か権兵衛が茶屋迄三里はないぞや來いとて來なけりやかつさきますぞ〜サツ
 サツコイ〜わけもなやと白平振有て納るとばた〜獅子の鳴物に成り所作立の人数六
 人派手成る捕の形り鉢巻尻はしより地廻の拵にて出て上下より取巻(一)わりヤア佃の三筋
 の網吉(二)新地の鼻を乗切て(三)此假宅へふん込れ(四)格子色をかせがれちやあ(五)土地
 の者の面が立ぬ〜(六)生ちヤア歸さぬ覺期しろ(網)エ、やかましいいけどうめら喧嘩を賣
 るなら買つてやらふ一度にかためて持て來い(杵)サアお前方は怪我せぬ内(白)少しも早く
 「云ふより早く引連て三弦抱へ急ぎ行(網)サア是柄はあれが相手(杵)助鐵砲は粟餅屋(白)
 片ッはし柄覺期しろ(六人)何をこしやくな「梅に鶯粟に餅どつこい離れぬ白に杵 Chatt き
 な粉を胡麻の鉢一ツ二ツは面倒な一度に投る粟餅のでつちてちぎつてあんころ〜〜ソ
 リヤキタヤレキタすとんとん最一ツもて來いアレハサノサどつこい土産の皮包み「又取
 附を投退る粟の曲春き戯れに笑ひ霽く春の興むつまし月とぞ祝しけるト又六人掛るを一寸
 立廻り皆〜引張の見得宜敷頭取出て(頭取)先今日は是限り

19
573

版權
興行
所有

明治廿八年五月廿日印刷
明治廿八年五月廿三日發行

(定價八錢)

著者 吉村新七

故

本所區南二葉町三十一番地

發行者 吉村いど

本所區南二葉町三十一番地

印刷者 山本銚次郎

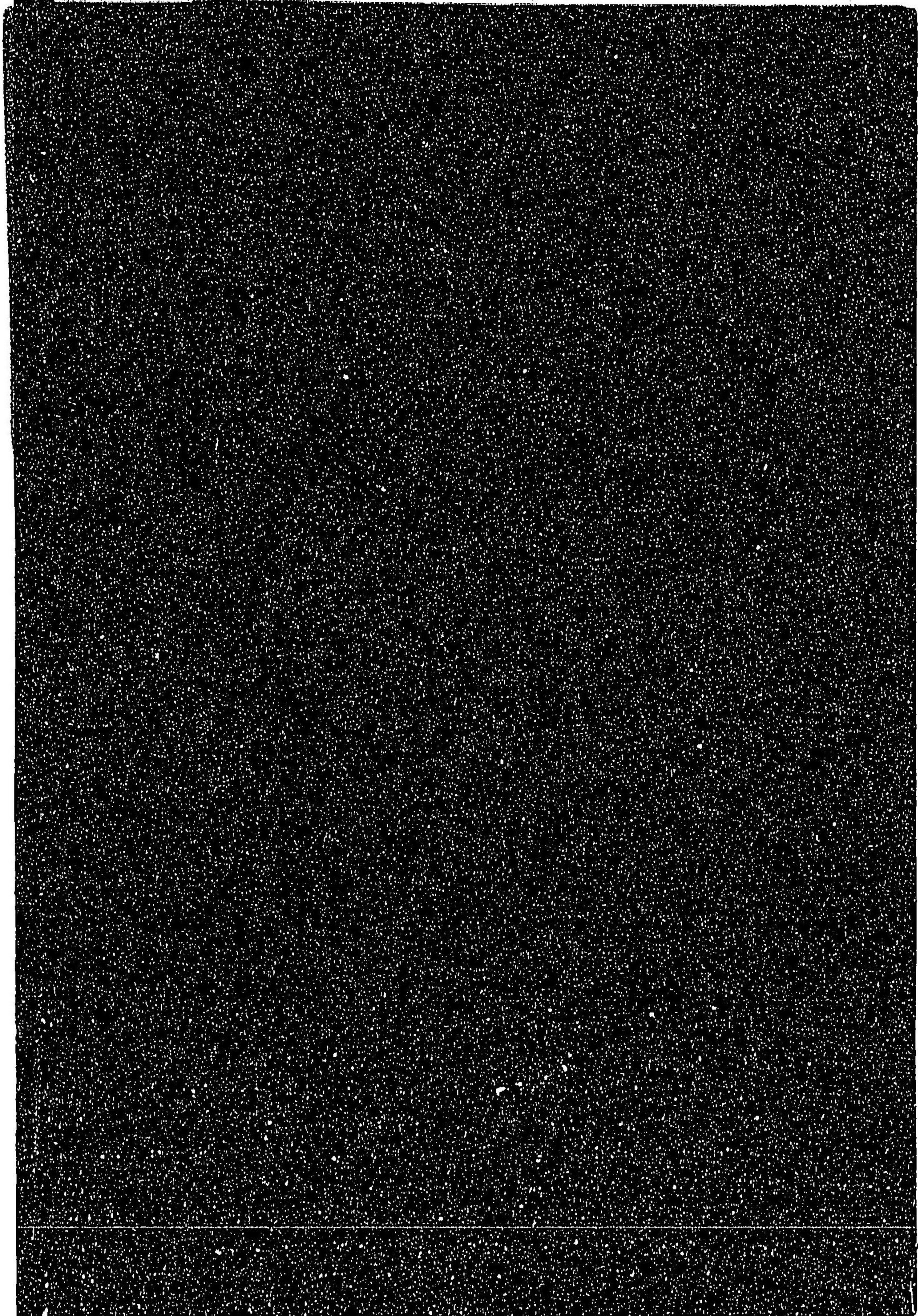
京橋區西紺屋町廿六七番地
秀英舍々員

印刷所 株式會社 秀英舍

京橋區西紺屋町廿六七番地

2/

19
503



19
503

088425-004-4

19-503

演劇脚本

吉村 新七
河竹 黙阿弥 / 著 鶴屋 南北 / 著

第4冊

M27-30

DBJ-0067



36.3.23